
ウィッヂクラフト Ain Suph Aur

みえさん。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウイッククラフト Ann Sophie Aur

【Zコード】

Z6838W

【作者名】

みえさん。

【あらすじ】

幼い頃から不運に巻き込まれる体质の久住明弥は、受験の日、不良に絡まれ、水道管の爆発事故にも巻き込まれる。慌ただしい中、明弥を庇うように入ってきた岩崎勇気は、明弥の「能力」は危険だと言い放ち……。現代日本を舞台にしたサイキックファンタジー。（ブログサイト掲載のものを加筆修正。軽度の残酷描写を含みます。

重複投稿（

アイン A i n

生命の樹というものがある。

旧約聖書では楽園の中央に知恵の樹とともに植えられていたとされ、カバラにおける宇宙と人体を象徴する思想。

生命の樹は、10の球体と22の経で示される、クリスチヤン・カバラで最も重点を置かれる象徴。その中で最も上には王冠を意味するケテルの球体が描かれる。

その更に上には全ての根源であるアインが存在する。

アインは「無」と示されることが多いが、それは人の言葉で表せるものでも概念で理解できるものでもない。すなわち神そのものを意味するとも言われている。

そのアインがケテルに近付くにつれ、人に理解しやすい存在となつていく。

アインのすぐ外側に、アイン・ソフ。その更に外側には最も、人の知性で捕らえやすい、アイン・ソフ・オウルがある。生命の樹を登る人が、ケテルを越えアインに近付こうとした時に、最初に触れるのがそれだろう。

ある女は、そのことを「神の片鱗」と呼んだ。

触れれば全てのものが自然と一体になる超常能力、ウイツチクラフトに目覚めると言つた。

無垢な彼女は信じた。

全てのものが神の力に目覚めることが本来あるべき姿なのだと。自然と一体になりアインに帰ることこそが本来の姿なのだと。

その思想が何を生み出すのかを考えず、ただ理想だけを追い求めていた。

そして、全ては彼女から始まつた。

1 見える影は

バレンタインも当日ともなれば店頭に並ぶ商品も少し飽きたような色を見せ始める。平日と言つこともあってか、街中を歩く恋人達も学生が多い。バレンタインだからといって浮かれている人もそう多くは無かった。

久住明弥は人混みをかき分けながら待ち合わせたファーストフードの店へと急ぐ。

今日は受験勉強の為の短縮授業だったが、ホームルームが長引いたために、約束の時間に遅れそうだったのだ。

がら実感した。

駅前通りの黄色い「M」の看板を見つけると、彼は少し走るようにファーストフード店の中に飛び込んだ。

冷えたていた全身が急激に暖められメガネが曇る。少し暑いくらいだった。

いらっしゃいませ、という店員に少し頭を下げて彼は店内をさがした。

「あっくん、こっち

川上ともみが手を振つて自分の位置を示した。

店内の客の何人かが一瞬興味を引かれたように振り返つたが、すぐにはそれぞれの食事に戻つた。

明弥はマフラーを外しながら彼女の向かい側の席に座つた。

「ごめん、遅れちゃつて。待つた？」

「ううん、平気。時間ぴつたりだよ」

彼女は時計を見ながら笑う。

相変わらず元気そうな様子に明弥はほつとして微笑んだ。

昔から変わらない大切な人だ。

彼女との関係を問われると正直言葉に詰まる。

幼なじみ。

その単語が一番しつくりくるだらうと思つ。幼い頃は良く一緒に遊び回つていたし、今でも頻繁に会つてゐるのだからそれが一番言い得ているようでもある。

勿論、彼女との関係を示すのはそれでは不十分なのは分かっている。けれど、それが一番的確に感じている。

トモミは上機嫌な笑みを浮かべながら綺麗な包みを差し出す。

「はい、これ。バレンタインのチョコレート」

「うん、ありがとう」

「今年は自信作だよ」

彼女は弾んだ声で囁つ。

トモミはそれほど料理が得意ではない。けれど、毎年バレンタインは手作りで用意してくれる。それが暖かくて嬉しい。

綺麗にラッピングされたチョコレートを仕舞うためにカバンを開くと、別のチョコレートが転がり出て床に落ちた。明弥は慌ててそれを拾い上げる。

「んん？ 今のも手作りっぽいけど？」

「どうだろ？ クラスの女子がくれたんだ。ノート貸したお礼につけ

て

「ふーん？ 何か妬けるなー。あつくん優しいから女子の子にもてそうだし」

口を尖らせて囁つトモミの言葉を明弥は真つ赤になつて否定する。

「え？ そんなこと、ないよ」

「そんなこと、あるんだよ。あーあ、私もあつくんと同じ学校だつたら面白かったのに」

明弥はトモミに確認をするように問つ。

「高校は、西ノ宮だよね？」

「うん、同じ高校。受かれば、の話だけじ

「トモミちゃんなら大丈夫だよ」

囁つと彼女は声を立てて笑つた。

「まーね。あつくんより、頭は悪いけど、運だけは良いから」

トモミは昔から運が良い。くじ引きで欲しい物を当てたり、遅刻覚悟で学校に行つたら先生が遅刻して結果的に間に合つたり。他にも小さな事であるが彼女がいいな、と思つたことは大抵実現してしまう。それだけの運を彼女は持つていて。受験だつて彼女が大丈夫だというとそうして実現してしまった。

「あつくんは頭良いから大丈夫だよね?」

「そんなに頭いいってわけじゃ……」

言いかけた時、店内がざわついた。

トモミががたん、椅子を鳴らして立ち上がる。

明弥も振り向いた。

ガラス越しに見える大通りに何か火の手が見えた。ちょうどはす向かいに位置する店から黒い煙が上がつていた。

「火事!」

彼女が声を上げる。

明弥は少し寒気を覚えた。

「…………ね、見に行つてみようよ」

「え? トモちゃん?」

まるで何かに取り付かれたかのように、彼女は外へと走る。コート着ることもせずに片手で掴んだ状態で、彼女はそのまま外へと飛び出していった。

彼女が飲んでいたコーラの紙コップをゴミ箱へ捨て、明弥も彼女の後に続いた。

外は既に人だかりが出来ていた。

道を挟んでこちら側と、向かい側。それに野次馬達が集まっている。ガードレールから身を乗り出すようにしてトモミはその黒煙を見つめた。

「…………ねえ、あれ、連続放火事件のやつかな?」

「トモちゃん、あんまりそっちに行くと危ないよ」

「凄い、まるで炎が生きているみたい」

彼女に、明弥の声は届いていないようだつた。

その目には燃えさかる炎と黒煙しか映つていない。楽しんでいる訳ではない。彼女にも自分にも火事に対してある思いがある。だから純粹に野次馬として見に来た訳ではないことを明弥は知っている。彼女がこだわる理由も理解出来る。

「トモ……」

彼女にもう一度呼びかけようとして、不意に、視線を感じた。明弥は反射的にそちらを見た。

大通りの向こう側にたまつてゐる野次馬の中に、見覚えのある姿を見つけて息を飲んだ。相手も、明弥を見て息を飲んだのがはつきりと分かつた。

（……まさか）

四十前後の背の高い男だつた。

男は躊躇つように視線を外した。が、すぐに彼の視線が戻される。

『危ない！』

誰かの叫びと、男の叫びが重なつた。

はつとして明弥はトモミの腕を掴んで後ろに引っ張つた。

車が目の前に接近する。

ぶつかつた、と思つた。

野次馬に向かつて突つ込んできた車は、まるで明弥とトモミを狙つたように真つ直ぐ突き抜けてくる。

時間にしてみればほんの一瞬だつただろう。明弥にはスローモーションの映像を見ているような感覚に見えた。

トモミだけでも助けようと思つたけれど間に合わない。そう判断したのは僅かの間。だが次の瞬間には明弥の目には予想していたのとは別の光景が見えた。

目の前に迫つていた車のボンネットがガードレールにぶつかるよりも前にひしやげたのだ。

まるで見えない力で叩かれたように車とガードレールが大きく曲がる。

何かがぶつかり合う鈍い音と、タイヤの擦れる高い音。それが同時に聞こえた。

ぱり、と音を立てて車が不自然な形に曲がり、ガードレールの上に乗り上げる形で静止した。

あと数センチ。

それでトモミと明弥は事故に巻き込まれていた。自分の目の前に曲がった車が見えた。何が起きたのだろうか。

判断しようとすると、頭が酷く混乱をしていた。 「び、ビックリした！」

トモミの声で明弥は正気に戻る。

はつとして、彼女を見返した。

「トモちゃん、怪我はない？」

「うん、大丈夫。やっぱり私、運が良いんだね」

明るく笑う彼女に明弥はほつと胸をなで下ろす。

それも束の間、ぱたり、と地面に何かが落ちる音が聞こえて明弥はぎくりとした。一瞬、トモミが倒れたのかと思ったが、そうではなかった。明弥たちの真後ろで女人の人が一人倒れていた。

明弥達の側にいた数人が驚いたように彼女を見たが、事故を起こした車と火事と彼女、どれを最優先すべきか迷ったような素振りを見せた。

近くにいた明弥が彼女に近寄った最初だった。

「だ、大丈夫ですか！？」

髪から靴下まで全身黒づくめの一十歳前後の女だった。遠くで消防車が駆けつける音が聞こえた。

男はバイクに跨り事故の様子を見ていた。

バイクも巨大であれば、跨る男も負けない巨漢だった。

髪は赤茶に染められ、眼光は鋭い。

まるで獣のような男だった。

「……目覚めた訳ではないだろ？」「

男はぼつりと言った。

低く唸るような声だ。

彼の手には携帯電話が握られていた。手も大きいために何も持つていないうにさえ見える。

「だが間違いはない」

彼はにっこりと笑った。

まるで得物を見つけたような残忍さを含む笑い。

「あれは、‘インパクト’だ」

2 それが彼の日常

店に入ると消火剤と色々なものが焼け焦げた匂いがした。立ち入り禁止を示す黄色いテープをくぐつて岩崎勇気は店内を見回した。不審火の可能性が高い火事現場。中学の制服を着た少年が現場に入ってきたのを咎めないのは、すぐ側に刑事の姿があるからだろう。出火原因を調べている鑑識の男が一瞬怪訝そうに彼の方を見やつたが、どうやら目撃者か店の関係者だと思われたらしい。誰も彼のことを咎める者はなかつた。

彼は周囲を見渡し嘆息する。

「確かに一件目と同じ気配が」

少年が言つと、背が高い刑事は頷いた。

目が細く、体格のいい彼は一見すると刑事と言うよりはヤクザの関係者のようにも見えてしまつ。悪い顔つきではないのに、そう見えてしまつのは彼の眼光の鋭さにあるのだろう。

彼の名は伊東猛という。

まだ「若手」と呼ばれる刑事だつたがその働きや感覚の鋭さはベテランの刑事とも肩を並べる程だと別の刑事から聞かされたことがある。少年もこの刑事が敏腕と呼ばれるのに相応しい人物であることを知つていた。

少年が伊東が評価に値する人物だと判断するのは、あの人、の部下を何年も続けているのだから。

「勇気」

呼ばれ少年は振り向いた。

警官にしてはラフな服装をした女が近付いてきた。何やら不機嫌そうだつた。

そう、伊東はこの人の部下を長い間続けている。

勇気は彼女を示す名を読んだ。

「母さん」

昨日もやはり家には戻つていないようだ。或いは勇気の眠つている間に出入りしたかと思ったが、彼女は出かける時に着ていた服ではなく、着替え用に持つて言つている服を着ている。

彼女の外見は若い。勇気がむしろ大人びた外見をしているためか、親子といつより姉弟に見えるだろう。だが確かに勇気を産んだのはこの女刑事だつた。母親らしいところはあまり見あたらないけれど、それだけは確かな事だつた。

眠たそうな顔で彼女は言つた。

「学校は？」

勇気は苦笑した。

その横で伊東が吹き出した。

「その様子だと忘れていますね。三年生は受験勉強のために短縮授業なんですよ」

「そうだつたかしら？」

悪びれもしない彼女に伊東は皮肉の籠もつた言葉を返す。
「家に戻る暇もありませんから忘れるのも無理もありませんが、あまり度が過ぎるとひねくれますよ」

それは勇気に対しても皮肉だ。

勇気は軽く男を睨んだ。母親も伊東を睨む。

そんなことで動じるよつならば既に部署を変えてくれと嘆願書を提出しているだろう。さすがにこの破天荒と呼ばれる女刑事の部下を何年もやつしているだけのことはある。彼は顔色一つ変えなかつた。顔色を変えず、話を元に戻す。

「それで、これは？」

勇気はその質問に頷く。

「こつち側の事件だよ」

言つと母親は興味があるのか無いのか分からぬ顔で言つ。

「そう。……表の事故は見た？」

伊東が勇気の代わりに頷く。

「はい。愛さんが来る前に少し調べました。火事に気を取られた脇

見運転というのが見解ですが、奇妙な点が

上司の名前を「愛さん」と親しげに呼ぶのは伊東が親密な関係にあるからではない。実際親子と懇意にしていたが、それが理由で彼女を名前で呼んでいるわけではない。彼女は苗字や役職名である「警部」と呼ばれるのが嫌いなのだ。

だからよほど改まつた席でない限り、彼女はみんなにそう呼ばせている。

それで通つてしまふのだからおかしなものだ。

キャリアでもなく、女で、しかもこの若さで警部と呼ばれているのだから彼女の腕は確かだつた。その実力が認められているからこそ彼女のわがままが通つてしまつ。彼女を中傷する側から言わせれば「警察庁のお偉いさんの娘だから」ということだが、彼女はそれを一笑で吹き飛ばす。

何であれ、彼女の肝が据わつてているのは確かなのだ。

「私も奇妙に思えるわ。あれだけ車がぐつちゃなのに、ガードレールはただ曲がつただけ。運転手が軽傷を負つただけ。奇跡よね。勇気は何か感じた？」

「ガードレールのこつちには悪意はなかつた」

含みのありそうな言い方に愛は少し眉を跳ね上げた。

問つように見つめられ、勇気は続ける。

「見間違いかも知れない」

「いいわ」

「一瞬だけ運転手のこの辺りに赤黒い影が見えた」

彼は蟀谷を叩く。

勇気には人には見えないものが見える。気配や影と言つた言葉で代用しているが、彼は人の纏うオーラというものや、幽霊や思念のようなものまで感じ取ることが出来る。その中で赤黒い影は「悪意」の事だ。

それは俄には信じがたい事であつたが、伊東は彼の能力を信じていた。彼にはそれだけの実績があるのだ。見えていなければ説明の

付かないような事柄を彼は言い当て、それが幾度と無く捜査を助けているのだ。勘で言つていいのであればそれもまた才能だうと思え思えるほどだ。

母親といい、息子といい、岩崎親子は不思議な親子だと思つ。

伊東は問うように首を傾げた。

「それはどう判断すれば？」

勇気は首を振つた。

「俺の見間違いかもしれないし、運転手は野次馬の中の誰かに對して明確な殺意があつたのかも分からぬ。ただ、怪我人がない以上はただの事故だ」

「そうね。ともかく、この火事と事故は無関係なのね？」

母親の問いに勇気は頷く。

「その点を接点と考えるとしては薄すぎぬ。偶然同時期に起きたと思う方が正しいと思う。ただ、このところ多く気がするんだ」

「多い？」

「こういう類の事件が、全部が全部というわけじゃないけど、根本で繋がつてゐる可能性を考えた方がいいかもしない」

根本ね、と愛が呟く。

「忠告として受け取つておくわ。……ところで、今日は意地でも帰るから」

「伊東さんも？」

問うと伊東は頷く。

「はい、じ一緒させて頂きます。夕食は俺が作りますが何か食べたるものありますか？」

勇気に向けて問い合わせられた言葉だったが、愛の方が先に答える。

「カレー、この間、CMでやつていたやつ」

ちらりと伊東が勇気を見る。

彼はそれでいいと頷いて見せた。

「八時くらいには帰れると思いますが」

「俺もそのくらいになると思う」

伊東は頷いてから外を示す。帰れ、と言つたのではなく車で送ると言つよつた素振りだ。勇氣は首を振つてその申し出を断つた。火事の現場から外に出ると、冷たい風でぐんと身体が冷えた。軽く身を縮め、寒さをこらえる。

目の前を車が通過した。

「……っ！」

勇氣は息を飲む。

赤黒い影が見えた。

車を運転する男に激しくまとわりつく赤黒い影。どこか血の匂いの混じる呪詛の匂い。

人がいれば、悪意を生む。激しい悪意は影を生む。だから、赤黒い影を見ること消して少ない訳ではないのだ。ほんの少しの人の感情の差で、普通の人でも見えてしまうことがある。

しかしあそこまで明確な影を見るのはあまり無かつた。

喉の奥に酸っぱいものを感じる。

誰かに憎まれているのか、それとも憎んでいるのか。

激しい憎悪をまとわりつかせた車はそのまま青信号の交差点に向かつて走り抜ける。

こみ上げてくる吐き気に一瞬口元を押さえた。

（大丈夫）

大丈夫だ、と自分に言い聞かせる。

こんなものを全て気にしていたらきりがない。分かっている。だから、気にしてはいけないものだと。

勇氣は背筋を正すと、車が走り抜けた方と反対側に向かつて歩き始めた。

喉の奥が酸で焼かれたように痛かつた。

3 偶然でなければ運命

脳を働かせると糖分が欲しくなると言つのは本当の事らしい。

貰つたチョコレートを食べながら明弥は英語の問題集を相手に奮闘していた。英語の問題自体は難しいことはない。ただ、単語を覚え切れていないために苦労するのだ。分かっているが、今は単語を覚えるよりも先に問題の傾向に慣れたかった。

トモミから貰つたチョコレートの中に同梱されていた手作りのお守りを傍らに置いて彼は英文を読み始めた。

あの火事から三日が過ぎる。

明弥の脳にはもうあの火事と事故の記憶は薄らいでいた。幼い頃から何かと事故に巻き込まれやすい体質の明弥にしてみれば、自分が巻き込まれた訳ではない事故のことはニュースで見た事件とあまり変わらない。興奮して勉強が手に付かない程のことでもないのだ。どたどたと階段を上がつてくる音が聞こえて明弥はペンを止めた。ノックもせずに突然ドアを開かれても彼は驚きもしなかった。

「ノックぐらいしなよ、マサ」

振り向いて言つと弟の政志は悪びれる様子もなく頭の後ろに手を回した。

今年の四月で小学校六年生になる政志はちょうどやんちゃ盛りの年代だ。注意してもあまり効果ないが、明弥は根気よく続けることに決めた。

政志は少し口を尖らせて言つ。

「兄ちゃんさー、そんなに勉強がんばらなくても良いだろ?」

「西ノ富はそんなに樂じやないんだよ」

「ランク落とせばいいのに。最近兄ちゃん勉強ばっかでつまんねー

の

言つて政志はベッドに座る。

構つてほしいのか、と明弥は息を吐く。

確かにこのところ受験勉強ばかりであまり政志と遊んでいない。受験が終わったら埋め合わせしようと思つけれど、それまでストレスを溜めさせてしまつたら可哀想だとも思った。

兄弟には姉もいるのだが、少し年が離れているのと性別の関係もあつて、政志は自分に良く懐いている。時々憎まれ口を叩くが、やっぱり甘えてくる弟は可愛いものなのだ。

「変更できないしね。それに西高じゃないと意味ないんだって」「…………トモミ姉ちゃん？」

政志は机の上のチョコレートを勝手につまみながら言つ。トモミが行くから自分もそこに決めたのか、と聞いかけてくるらしい。からかい半分、『ご不満半分と言つところか。

何を考えているのか想像がついて明弥は苦笑した。

「そんなんじやないよ」

「べつにいいけどね」「拗ねたような声。

トモミと政志、どっちが大切なか、と問われているようだった。『機嫌取りも大変だが、別に嫌でもないのだから厄介な所だ。

「映画」

「え？」

「春のアニメ祭り、俺の入試終わつたら見に行くだろ?」
にへら、と政志の顔が緩んだ。

「兄ちゃんがどうしてもつて言つならつき合つよ」

憎まれ口だが、緩んだ顔では憎たは感じられなくなつてしまつ。どうしても、と明弥は笑つた。

「あ、そうだ、兄ちゃんミモリって女人の人知つてる?」「ミモリ?」

覚えが無い。

「知らないけど、その人がどうかした?」

「兄ちゃんに電話」

「ほらほら、そう言つのは先に言つて」

「忘れてた」

べ、と舌を出す弟の頭を小突いて、明弥は一階の電話の所まで急いだ。

相手を随分待たせてしまったのではないだろうか。
階段の最後の数段を踏み外し、半ば滑り落ちるような形で一階に下り慌てて受話器を上げた。

「すみません、お待たせしました。明弥ですけど」
ぱたぱたした音を聞かれただろうか。

くすり、と笑うような声が受話器の向こう側から聞こえてきた。

『久住明弥さん?』

柔らかな女の人の声だった。

明弥は戸惑つた。

「あ、はい……えっと……」

『私は、ミモリユリ』、水の守る神祐の里の子で、水守祐里子とります。この間救急車で運ばれた時、付き添つて下さったそうで』

「え? あ、ああ……あれ、でも何で電話番号……』

『病院の方に聞きました』

「ああ、そうか」

明弥は思い出しながら呟いた。

三日前の事故の時に、明弥達のすぐ側で倒れた女人だ。救急隊員が駆けつけた時に、たまたま側にいた明弥が姉弟と間違われて病院に付き添うことになつたのだ。あの時確か、一応身元の確認のために名前と住所電話番号を書いた。

「えつと、その……田が覚めるまでいられなくて……大丈夫でしたか?」

『はい、おかげさまで』

よかつた、と自然に言葉が漏れた。

電話の向こうの彼女はどこか微笑んでいるような声で言った。

『それで、お礼がしたくて電話したんですけど』

「あ、そんなこと気にしないで下さいよ。別にそんなつもりだった

訳じゃないですから』

『そう言つと思つていました』

彼女は当然というよつに言つて続けた。

『でも、それでは私の気が済まないんです。だから、一度だけお助けします。』

『……はい？』

『あなたの声を聞いて確信しました。あなたは必ず私の助けが必要になる。ですからその時に。もちろん無料ですよ』

『あの、話が見えないんですけど、水守さんは弁護士とか探偵とかの仕事をされているんですか？』

『いいえ、と彼女は答える。

明弥は首を傾げた。

彼女の言つていることが全く分からぬ。

『いずれ、全て分かります。なら、少し謎の方が楽しいと思いませんか？』

『え？ あの……』

少しどこかの謎ではない。

水守の話はどうも要領を得ないし、分かりにくい。助けが必要になるとはどういふことか、どうやって水守が助けるというのだろうか。

『出会つたのが偶然でなければ運命です。……それではいづれ、こちらから連絡をします。どうぞ、お気を付けて』

『え、ちょっと…』

がちやん、と一方的に電話が切れた。

受話器の向こう側からはツーッーといふ電子音しか聞こえてこない。

ひょつとして、少し特殊な思考の持ち主と関わってしまったのだろうか。別に嫌な感じのする人ではなかつたが、正直戸惑つてしまふ。

明弥は受話器を置いた。

考えても答えが出ないなら考えない方がいい。

からかわれたのならそれで良いし、そうでないのなら彼女の方からまた連絡をくれると言つた。だったら考えるだけ無駄なことだ。

「……さて、勉強し直すかな」

彼はぐつと背伸びした。

「いつ言つ時は、あまり気にしない性格で良かつたと思つ。だが、言葉の裏に隠された意味をもう少し真剣に考えていれば、後々後悔することになる。その時の明弥には知る術もなかつた。

4 思い出の匂い

男は小児病棟への入り口をくぐつた。

190センチを軽く超える立派な体格の男の髪は赤い。肉体は鍛え抜かれ見る者を圧倒するほどの気迫を備えた男だ。目つきは鋭く、小児病棟はおろか病院に入つただけでも不審者と疑われそうな外見をしていたが、スタッフや長く入院している子供達はちらりと見やつただけで気にする者はいなかつた。

皆、彼が見舞いの一人である事を知つてゐるのだ。

「南条さん」

ナースセンターにいた若い女看護士が男の姿を認めて声をかける。彼はカウンターに備え付けられている見舞い受付用の紙を取り出しながら僅か表情を緩ませた。

「ああ、あんたか」

彼女は男を見上げて微笑んだ。

南条太一の身長は高い。看護士、木村早希の身長は低い方では無かつたが、どうしても見上げる形になつてしまつ。

「いつもお疲れ様です。鈴ちゃんなら図書室の方ですよ」

「ああ、ありがとう。……それと、この間のチョコ畳がつたよ」

早希は微笑む。

「良かった。南条さん甘いモノ苦手なんじゃないかつて思つたんだけど」

「そんなことねーよ、俺、甘いモノ結構好きだから」

そう言つた彼の表情は優しい。

同僚達の中には彼の外見だけを見て怖がる子もいたが、早希はこの厳つい男に好意を持つていた。元々彼女の父親も彼のようになり人だつたからそう言つう人に対しても免疫があるのだろう。最初に見た時にはさすがに驚いたが、実際話をしてみて彼が優しい人であると分かつた。妹想いで、ぞんざいな所はあるけれど、本性は人懐つ

「い犬のような人だ。

外見のせいで勘違いされて苦労してきたのではないかと早希は勝手に思っていた。

不意に男の手が彼女の頭に伸びる。

「え？」

突然髪を捕まれ彼女は動搖した。

太一は彼女の髪の一房を取り、キスをするよつて口元に押し当てた。

「ああ、やっぱりあんただ」

「え？」

「シャンプー、変えただろ?」

ほんの僅か、彼の厚い唇に笑みのようなものが浮かぶ。

「え、あ、はい。良く分かりましたね」

早希は慌てて彼から離れる。

顔が、赤くなつていなかろうか。

「入ってきた時から花の匂いがしていたんだ。あんたの近くで一層強くなつた」

「……嫌いですか？」

「いや、懐かしい匂いだ。俺の昔住んでいた庭の花の匂いがする。俺は好きだ。あんたに似合つているよ」

さらりと言われてしまつた。

遊び慣れている風でもありながら、自分だけに特別そうと言われているような気がして、早希は戸惑つた。

だが早希はこの南条太一が掛け値なしで本気で笑つた所は見たことがない。微笑んだり、妹の鈴華に対しても目一杯の笑顔を見せるが、どこか無理をしているようでもあった。

だから余計に彼が気になる。

入院患者の兄、それ以上の感情を彼女は抱いていた。

こんな事をつてもいけないとは思うが、鈴華のもう一人の兄が

見舞いに来るよりも、彼が見舞いに来る時の方が嬉しい。彼の事をもっとよく知りたいと思う。やはり恋をしているのだろう。

話を逸らすように早希は彼を見上げた。

「……な、南条さんつてピアス片耳だけしかしてませんよね、何か理由があるんですか?」

尋ねると彼は左耳に触れた。

ループのピアスが僅かに揺れる。

「昔の名残だ。前はもっと沢山ついてたんだが」

「……女人にあげたんじゃ」

「ぶつ、と彼は吹き出す。

早希は真っ赤になつた。

「あんた、博識だねえ」

「すみません、今の忘れて下さい」

「てつきりゲイとか言い出すかと思つた。そつじゃないし、贈つた女もいない」

彼は笑いを堪えながら言つた。

男の人が右だけにピアスをするのはゲイの証だという。彼の右耳にはピアスの存在はなく、それを疑つた訳ではない。彼はそれを理解していた。そして、左耳だけにピアスをする意味も知っていた。知つていて敢えてそうするのは彼女など要らないと言つ牽制だろう。

うか。

それとも。

「あ、来てくれたの?」

呼びかけられて太一は振り向く。

「鈴華」

男の顔に今までとは違つた優しい微笑みが浮かぶ。

どうあっても、妹には敵わない。

彼の妹は小学校五年生だ。身体が弱く入退院を繰り返している。同年代の子供よりも小柄で幼く見えるが、落ち着いた雰囲気が逆に

大人びても見せた。彼も、彼の兄もこの妹のことを溺愛しているよう見える。早希にとつては患者の一人でしかないのだが、それでも彼女は礼儀正しく良い子だと思う。

彼女は図書室から借りてきたのか少し難しそうな本を抱えていた。

太一はそれをまとめて片手で掴んだ。

「病室までお持ちします、お嬢様」

気取った彼の挨拶に鈴華はにこにこと笑う。

「何か変

「そうか？」

「うん、変。……よね？」

彼女に振られて早希は吹き出す。

ふてくされたように太一は口をへの字に曲げた。

本当に良い子だ。病気で怖い思いも沢山しているのに、明るくて、不満や愚痴を漏らすことはない。良い子過ぎて逆に可哀想な位だ。

彼女に早く治つて欲しいと思いつながらも、ずっと入院していく欲しいと思つ自分がいることに早希は辟易とした。

「誰か来ていたのか？」

太一は病室に向かいながら鈴華に問う。

彼女はうんと頷いた。

「クラスメートの男の子」

「最近、良く来るな。どんな奴だ？」

「優しくて良い子よ。少し太一くんに似ているの」「俺に？」

太一は怪訝そうに彼女を見た。

彼女はくすくすと笑う。

こんな団体のでかい小学生がいるのだろうか。確かに最近の子供は発育が良いと聞くが、さすがにこんな厳つい小学生がいたらさぞかし目立つ事だろう。

鈴華の事だから、何をどう捕らえて似ていると言つたのか分から
ない。

会つてみた方が手つ取り早いだらう。

「……太一君、腕のところ、どうしたの？」

「ああ、三日ほど前にちょっとな」

彼は安全ピンとビスで止めたジャケットの袖を見せながら言つ。

「破けたから留めたんだが、変だつたか？」

「そういう服に見えなくはないけど……買い換えたら？」

「うーん、と太一は唸る。

「これ、気に入ってるんだよな。嬢が選んだ奴だし」

「今度、外泊許可とれたら買いに行きましょう。腕を組んだら痛そ
うだもの」

「ん、じゃあ、またお前が選んでくれよ」

笑顔で言つと、彼女はうんと笑つて頷いた。

自分の腰程までしか身長のない少女の頭を撫でて思つ。

この少女が他の子供達のように自由に歩けるようになるのはい
つだらうか。せめて自分の体力の半分くらい分けてあげられれば。

今はまだ何も出来ない。

(だがいつかは、きっと)

そのためになら、手段を選ぶ必要はない。

優しいこの子は泣くだろう。

それでも、この子の為なら何だつて出来る。

何だつて。

バレンタインに貰つたトモミのお守りは案外と良く利いた。

午前中の試験は思つてはいたよりも上出来だった。

午後も続く試験に備えてトイレを済ませた明弥は手を綺麗に洗つてからポケットからお守りを出した。ピンク色の布を袋状に縫い合わせて「合格!」という刺繡が入つている。所々ほつれているが、それがまた嬉しかった。

不器用なトモミが、一生懸命作つてくれたものだ。
嬉しくつて、頬が緩む。

「あ、ごめんなさい」

入ってきた男子生徒にぶつかり明弥は慌てて謝る。
制服を見てぎくりとした。

他校の、生徒だ。

受験生だというのに妙にガラが悪い。制服を着崩して、靴も中途半端に履いている。リーダーとおぼしき人物の後ろに、一人見えた。本当に西ノ宮の受験生なのだろうか。

「何だ、お前、にやけて気持ち悪いな」

「すみません、通して下さい」

明弥はぐつと表情を引き締める。

本能的に絡まれると思った。

入学試験に来ているのだから揉め事は起こしたくない。

「お前達、何か聞こえたか?」

リーダー格が言つ。

にやにやと笑つて後ろの男たちが首を振つた。

(まづいな……やっぱり絡まれたか)

じついう連中に絡まれる事は良くある。だから絡まれること自体

は慣れていたがやり過ごすことに慣れている訳ではない。

自分は昔から運が悪いのだ。

事故や事件もそうだが、他人より巻き込まれる率が高いだけで、今もまだ五体満足に機能しているのだから別に不幸だとは思わないが、何もこんな時まで絡まれることはないじゃないかと少し嘆いた。

人生を左右する大事な試験なのに。

明弥はぐっとお守りを握った。

後ろに控えた一人がそれに気付く。

「こいつ、何か持っているぜ。……何だこの不格好なお守りは」

「ちょっと……返して下さい！」

「『モミ』だろ？『モミ』は『モミ』箱に捨ててやれよ

お守りが、取り返そうとして伸びされた明弥の手をすり抜けてリーダーの手に渡る。

「汚物だろ、だつたら便器の方がいいんじゃねーの？」

「まつ……」

後ろから一人に捕まれた。

目の前で見せつけるようにトモミのお守りが揺れる。

お守りが、小便器の中へ、放り込まれる。

トモミの気持ちが。

踏みにじられる。

彼女なら笑つて、むしろ明弥の事を心配してくれる。

だけど、

（嫌だつ）

止めてくれ。

声は、言葉にすらならなかつた。

腹の奥底から、何かがせり上がるよつて出てきた。

それだけは、嫌だ。

「つー！」

叫んだ。

声にならない声で。

刹那。

「！？」

ドン、と何かが衝突したような、破裂したような音が響く。大きく揺さぶられて男たちと共に明弥はトイレの床にしゃがみ込んだ。全身が水浸しになるのを感じる。トイレの水道管から水が止めどなく噴き出していた。

破裂したのだ、と明弥は悟る。

「…………ってえ」

明弥を掘んでいたうちの一人が頭を押されて蹲つた。

「…………？」

何が、起こったのだろうか。

ジリリリリ、と激しい警報の音が鳴り響く。

水に流され、トモミの作ったお守りが明弥の手元まで流れて来る。明弥はそれをぐっと握り込んだ。

「お前達、何をしたんだ！」

咎めるように叫んで入ってきた教師が、その惨状を見て絶句する。水道管の破裂したトイレの中は水浸しになりその中に四人の男子生徒達が蹲っている。

何が起こったのか、現場に居合わせた本人達すら分からない。後から来た教師達もまたどうして良いのか判らない様子だった。元栓を止めきます、と誰か一人が管理部屋へと走つていった。やがて、吹き出す水は弱まつた。

「お前達、一体何を……」

「そいつが！ そいつが何かしたんだ！」

リーダーが明弥を指差して叫ぶ。

「そいつが何か叫んだ瞬間にこつなったんだ！ 何かしたならそいつが……」

「無関係だと思いますよ」

冷静な声が聞こえた。

明弥は視線を上げる。

「今日は寒気が凄いらしいですから、水道管が凍つて破裂したんでしょう。この辺じゃあまり無いんですけど、長野とか寒い地域の方では時々あるようですから」

彼も受験生だろうか。

トモミと同じ学校の制服を着た男子だつた。

落ち着きすぎている判断に教師が戸惑つたような声を上げる。

「君は……」

「岩崎勇氣。受験生です」

戸惑う教師の後ろでもう一人が「警察庁の」と耳打ちをした。一瞬驚いた素振りを見せたが思い当たつた所があるのか、納得したよううに頷いた。

岩崎は水浸しのトイレの中に足を踏み入れ、なおも喚き散らすり一ダ一格の男の横に屈んで何やら耳打ちをした。

蒼白になり、男は喚くのを止める。

何を言ったのだろうか。

訝つていると、いつの間にか入ってきた教師達に立つように促されタオルを渡された。タオルの暖かさに、ようやくからだが冷え切つている事に気付く。

春に近いとはいえ、先刻岩崎の言った通り、今日は寒気が襲つている。その中で水浸しになつたのだ。

とてつもなく寒かつた。

ガタガタと震え出す明弥を見て、誰かが「保健室へ」と言つ。

「俺が付き添います」

「ああ、じゃあ岩崎君、頼むよ」

「はい」

明弥の見えないところで何か会話が交わされ、震える彼の肩を誰かが抱いた。恐らく岩崎だろう。彼に促されるままに歩きながら明弥は大勢の人に見られている気配を感じていた。

がやがやと騒がしい。

教室に戻れ、と教師達の声に混じつて、あの人格好良い、と呟く

女子の声が聞こえる。

明弥は岩崎を見上げた。

確かに端正な顔立ちをしている。

「お前」

岩崎の目が明弥を睨む。

「自分が、何したか分かっているのか？」

「……え？」

意味が分からず問い合わせると彼は小さく舌打ちをする。

「分からないフリか、それとも本当に知らないのか。ビッちにした
つて自覚した方がいい。お前のそれは危険だ」

「え…？ それって？」

遮るようにがらがら、と音が響く。

暖かい空気と保健室の匂いがした。

保険医らしい女がビッグしたの、と驚いたように声を上げた。岩崎
が何かを説明して、ストーブの側に明弥を座らせる。明弥の身体の
震えが強くなつた。ストーブの熱気で身体の冷えがますます強調さ
れたのだろうか。

彼が落ち着き、身体の震えも止まる頃、岩崎の姿は保健室には無
かつた。

代わりに先刻の三人組が明弥同様に震えていた。

「映画、アニメじゃなくても良かったの？」

「うん、洋画が見たかったんだ」

政志は大切そうに映画のパンフレットの入った袋を撫でた。

映画はアクションもコメディもなく、小学生が見るにはつまらない
そうな内容だと思えたが感動系の作品でそれなりに面白かった。政
志は字幕を追うのがやっとといった様子だったが、それなりに満足
したようだ。

普段はアニメばかり見ているが、背伸びをしたいのだろう。明
弥にも経験があるから少し微笑ましく思えた。

見終わった後、マクドナルドにでも行く予定だったが、政志の要
望でカフェに入った。

白い椅子とテーブルに、青緑色のパラソルが差されたテラスがあ
るカフェだった。

春の暖かな日差しの落ちるテラスで暖かい飲み物を注文する。こ
れで、隣のビルが工事中でなければ風景も良かつただろう。
「……にが

飲み物を口にして政志が表情を歪める。

「ほら、やっぱコーヒーよりこっちの方が良かつただろ？」「..」

言って明弥はホットココアを政志の前に差し出す。
渋い顔で彼は受け取った。

「ごめん

また意地を張ったような言葉が返ってくるだらうと予測していた
明弥は思わず素直な態度に目を丸くした。

「……やっぱ兄ちゃんみたいになれないよな

「ん？ 何か言った？」

「何でもない。それより、高校合格オメデトウゴザイマス

「うん、ありがとう」

試験の後、風邪で寝込むことになつたが、入試はまともに受けられたし、出来も良かつた。おかげで明弥は高校合格を果たした。トモミもどうやら合格したようだ。これで春からは一人揃つて西ノ宮高校の生徒になるのだ。

クラスは同じになるとは限らないけれど、トモミと同じ学校に通えるのは少し嬉しかつた。楽しい三年間になるだろ？

「んー、だけどプレッシャーだなあ

「何が？」

「俺も西ノ宮行けってお母さんに言われそудだし

確かにそれは言われそудだ。

「政志は、政志の行きたいところに行けば良いんだよ。奈津姉だつて散々揉めて女子校に行つたんだし。状況違うの確かだけどね、無理をする事は無いんだよ」

「行きたいところが特になきから迷うんだよ」

「進路決めるのはまだ先なんだしゅつくり悩めばいいよ」

明弥は取り替えたコーヒーを口にする。

政志は複雑そうな顔をする。

「そんな頃は兄ちゃんだった……

きらり、と何かが煌めいた。

工事中のビルの屋上。

訝しんで顔を上げた瞬間、彼の意識は遠のいた。

ほんの僅か彼の記憶が飛ぶ。

何も分からぬ。

気が付くと明弥の目の前には鉄筋が突き刺さつていた。破壊されたカフェのテーブルや椅子が、辺りに散乱している。ざわざわと周囲がざわめいた。

「？」

「……兄ちゃん」

怯えたような、か細い政志の声が腕の中から聞こえてきた。

ちょうど弟を抱きかかえるようにして明弥は鉄筋を見ていた。

先刻まで手にあつたはずのコーヒーはもう手元にない。

何が起こったのか理解できなかつた。

状況すら分からない。

「今……何が……」

周囲の人の言葉でビルの屋上から鉄筋が落ちてきたことに気が付く。

それはまるで明弥たちを狙うように彼らのいた場所に落ちてきたのだ。怪我はないのか、と問いかける男の質問によつやく自分が間一髪のところで政志を連れて逃げたことが想像できた。

一瞬の記憶が全く無かつた。

けれど、確かに今明弥は政志を抱きしめて壊れたテーブルから離れて座り込んでいるのだ。どう行動したのか全く覚えていないけど、助けなければ、と思ったのだけは強く感じていた。

ぐちゃぐちゃになつたテーブルを囲んで人々が口々に何かを言つてゐる。衝撃が強かつたのか隣のテーブルにいた人達も何人か飛ばされて倒れていた。

「政志、怪我は？」

「ない……けど、兄ちゃん、今……」

「大丈夫、何も心配するな」

怯えた声を上げる政志に明弥は優しく言う。

こういつた事故に巻き込まれることは良くあつた。大抵一人でいる時に、上からものが落ちてきたり、通り魔に襲われたり。明弥にとつては小さい頃から幾度と無く遇つてゐることだから珍しい事ではないのだ。

けれど、政志にとつては大事だ。

あのままあの場にいたのなら、一人とも命はなかつたのだ。

バレンタインの日に起こつた事故を思い出す。

あの時も何事も無かつたが、トモミが近くにいた。

自分がいくらこんな事故に巻き込まれても構わない。けれど、誰

かが一緒にいる時、誰かを巻き込むような事故になってしまふのなら、この巻き込まれやすい体质が呪わしい。

そう言えば岩崎は言わなかつただろうか。

明弥のそれは危険だから、自覚した方がいいと。

それは、このことを言つてゐるのだろうか。

(危険を、引き寄せる体质……?)

がん、と鉄筋が鳴つた。

また何か上から降つてきたのだろうか。

思った瞬間、明弥は凍り付いた。

周囲から耳を劈くような悲鳴が上がる。

「つ……！」

政志が身をよじつて明弥の首に巻き付いた。

獸が、いた。

巨大な犬のような生き物。

犬ではないと思ったのは大型犬を軽く超える大きさと、その毛並みが赤銅色をしていたからだ。

まるで。

まるで、赤毛の狼。

ぐるる、と狼が唸る。

明弥を見つめ、まるで獲物を見つけたかのよつ。

「……政志、逃げるんだ」

「……で、でも、兄ちゃん……」

身体が震える。

だけど、政志だけでも守らなければ。

「いいから、逃げるんだ。あいつは、多分、俺を狙つてゐるから

「え……」

戸惑つた政志の声。

どん、と彼を人混みの方に押しやつて、真逆の方向に明弥は走り出した。それを避けるように人混みが割れる。危険を引き寄せる体质。

ならば、あの赤毛の狼も自分を追つてくる。

その、予測は正しかつた。

赤毛の狼はものすごいスピードで明弥の背中に飛びかかつた。

「……っ！」

はじき飛ばされるようにして押し倒される。

見えたのは、鋭い牙と、犬とは思えない刃物のような爪だった。

死ぬ。

そう思つた。

目を閉じている暇さえなかつた。

刃物のよつた爪が顔面に向けて振り下ろされそつになつてゐた。

「……！？」

だが、その爪は一向に明弥の顔面に落ちてこなかつた。

赤毛の狼は、まるで襲うか否かを葛藤しているようく悲痛な呻り声を上げてゐる。その姿が、まるで人のよつたシルエットを帶びて見えた。

犬のよつた形のはずなのに、四つん這いになつた人のよつた形が見える。

一瞬だつた。

けれど、確かに赤毛の獣の顔が、人の顔に見えた。

苦しむよつた、男の顔。

（……何？）

がつん、と音がして不意に身体に掛かつて重みが消える。

「怪我はないか！」

男に助け起こされ、明弥は椅子で殴られた様子の赤い狼の姿を見た。

明弥は顔を上げて男の方を見る。

四十年後半くらゐの目つきの鋭い男だつた。格闘技の心得のある人だらうか。スーツを着てゐたが、その上からでも男の筋肉が感じ取れた。

「君は、早く逃げなさい」

「だけど……」

「若い子が、こんなところで命を落とすもじやない。おじさんは警官だ。少しほうのにも慣れている」

男は冷静そうにして言った。

先刻、自分が政志に取つたのと同じ態度。だから分かる。

こんな事に、慣れている人なんていない。

狼が起きあがつた。

意識をはつきりさせようと首を振つている。

「逃げなさい」

明弥は首を振つた。

駄目だ。

あれは、どんなに逃げたつて明弥を襲つてくる。

今ここで、この刑事さんに対処を任せたとしても、変わらないだろ。犠牲者を出すなら、自分だけでいい。

「……狙いは、僕だ」

「……何？」

男が聞き返す。

瞬間、狼が跳ねた。

明弥は警官を押しやつて跳ねた下方をくぐり抜けるように狼に向かつて走つた。今まで明弥のいた場所に爪をめり込ませた狼は踵を返し、再び明弥の方に向かつて走り出す。

落ちていたパラソルの柄を掴んだ。

重く、持ち上げるのがやつとだつたがそれを何とか引き上げると、遠心力で大きく振れた。青緑色の傘の部分が狼を巻き込み、パラソル自体の重さで横に飛ばされた。

遠巻きで見ていた群衆から歓声のよつたものが上がる。

（まだだ）

明弥は急いで人の少ない方に向かつて走り出した。

まだ、狼が気絶したわけではないだろう。

多分再び起きあがつて自分の方に襲いかつてくる。

兄ちゃん、と遠くから政志の声が聞こえる。

君、と呼び止める警官の声が聞こえる。

どちらも無視して明弥は走った。

振り向かず、狼も走り出したのが分かつた。

足の速さではいつも後ろから数えられる所にいる明弥だ。動物の足の方がずっと早い。追いつかれるのは一瞬だろう。

だけど、少しでも人から離れたかった。

明弥の進行方向の道に、車が止まつた。

車の後部座席のドアが開かれ、中から見知らぬ男が叫ぶ。

「乗りなさい！」

本当は乗るつもりなど無かつた。

乗れば車の人に迷惑がかかる。

だが、明弥は見えない力に押された。まるで引き込まれるようこそ、

転がり込むように車に飛び乗つた。

ドアが半開きのまま車が発進する。

獣が追つてきていた。

「坂上、人気のない方向へ

「心得ております」

運転手が答えた。

明弥は自分を招き入れた男を見る。

微笑を浮かべた、穏和で落ち着いた感じの男だった。二十代から四十代、どの年代にも見える不思議な男。

「あのっ

声をかけると男は頷く。

「大丈夫、分かっています」

何を分かっていると言つただろうか。

有無を言わせないような笑顔で言われてしまえば黙るより他が無かつた。

猛スピードで走る車のバックミラーに、赤い影が映る。明弥は振り返って確認する。

「追いかけてくる」

「気に入られましたね」

男は楽しげに言う。

明弥は男を見返した。

「あなたは、狙われています。人から離れるという判断は賢明でした。おかげで彼を人から離す事ができます」

彼、と小さく呟く。

まるで狼が人であるような言い方だ。

確かに明弥は一瞬、あの狼が人間の男のように見えた。だが、狼男でもあるまいし、本当にそんなことがあるのだろうか。

「あなたは、あの狼が何なのか知っているんですか？」

問うと男は笑顔を崩さず答える。

「はい、知っています」

「一体あれは……」

「説明は後にしましょう。今は、我々は対処する術を知っているとだけ申し上げておきます。大丈夫、何も心配することはありませんよ」

心配することはないと言われても安心出来るわけがない。

明弥は車の速度計を見る。それはもう既に100キロのスピードを超している。なのに、後ろを追いかけてくる赤い姿は消えない。男はバックミラー越しにその姿を見つめながら落ち着き払った様子で腕組みをしている。

彼は高級そうなスーツを着ていた。坂上と呼ばれた運転手の着ている服も安そうには見えない。車種は分からないが、内装を見る分には車も随分と高そうだ。

この人達は一体何者なのだろうか。

あの狼の対処の方法を知っていると言つたが、一体どんな関係があるのだろう。

普通、街の中に獸がいたとして考えるのは熊や狸のよに山から下りてきたか、あるいは動物園から逃げ出したか。

どう考えてもこの人達は動物園の関係者には見えない。むしろ、禁止されている動物を密輸しているような人達に見える。まるで逃げ出した商品を捕獲しようとしているような。

(密輸?)

明弥は自分の考えに違和感を覚えた。

仮に彼らが密輸をしているとして、商品である動物を「彼」と呼ぶだろうか。それに、逃げ出したものを捕獲するのに、あんな風に目立つ行動を取るだろうか。

分からぬ。

けれど、この人達は、人を巻き込まないよに遠くに逃げようとしている。

明弥を助けようとしてくれている。

悪い人たちのよには思えなかつた。

「！」

どん、と何かが車の上部に落ちてきたような音が響く。

ぎしりと車体が軋んだ音を立てた。

呆然と、彼は立ちつくした。

兄が犬に襲われて挙げ句見知らぬ車に連れ去られた。どうすればいいのか解らず政志は車の去った方向を見つめていた。

「君は先刻の少年の知り合いですか？」

男に話しかけられ、政志は頷く。

明弥が獣に襲われている中、助けてくれた男だ。彼は事態の収拾しようとカフェの人間などに指示を出していた。どこかに電話を掛けている様子だったが、格好や口ぶりから察するに、刑事なのだろうと政志は思った。

案の定、男は警察手帳を示した。刑事ドラマで見るような手帳と少し違った。彼は中津龍一と名乗る。手帳にも彼の写真と名乗った通りの名前があった。

少し警戒心を減らして政志は答える。

「……弟です」

「名前は？」

「久住政志。兄の名前は明弥です」

彼は満足そうに頷いて次々と色んな質問をした、問われるままに政志は答えていく。その都度確認を取りながら男は手帳に書き込んでいった。

本物の刑事もこいつして手帳とかに書き込むんだな、とぼんやりと眺める。

不意に、涙がこぼれた。

「……っ」

手の甲で涙を拭つた。

今は、泣いている場合でもないのに。明弥の為にも今は刑事の質問に答えてすぐに探せるようにしてもらわなきゃいけないのに。そう思う程に涙が溢れる。

押しつぶされそうなほど不安だった。

兄が側にいないことがこんなにも不安だとは思っていなかつた。

「ちょっと、中津くん！ 男の子泣かせてどうするのよっ！ 重要参考人だからつて尋問していいって思っちゃダメよ…」

声を聞いて政志は顔を上げる。

近付いて来たのは綺麗な人だつた。綺麗だけれど、女性の服装をしているけれど政志にはそれが男にしか見えなかつた。声もやや野太いものが混じつてゐる。

中津は軽く顔をしかめた。

「仕事をする時はきちんとした格好を……」

「非番中に呼び出されたよ。文句言うなら所長に言つて頂戴。……大丈夫？ あのおじさん怖いからね、驚いたでしょ？？」

綺麗な男の人は政志の前に膝を付いて微笑む。

香水だろうか。男の人にはない優しい匂いがした。

「政志くん、ね？ これ、大切な物のなんじやないの？」

オカマは政志の前に袋を差し出した。

映画の、パンフレットが入つてゐる袋だ。

明弥より大切なものではないが、大切な物だ。大事そうに持つてきてくれたのをみて何故か不安が少し和らいだ。

まるで、今一瞬明弥が戻ってきたかのようだつた。警察は当然にならないと大人はよく話をしていたけれど、この人なら信用出来る気がした。

政志は彼に抱きついた。

「あらあら、可愛いわね。……大丈夫、お兄さんは私たちが責任持つて見つけるからね。心配しなくて良いわ」

「……うん」

車の上部が何か硬いモノで殴られているかのようにガンガンと音が鳴り響いた。道行く車がどんどんと脇に避けていくのが見えた。あの獣が今屋根の上に乗っているのだ。

明弥は頭を軽く押さえ、音と衝撃に耐えた。

男は少し身を乗り出し、運転席に座る男に指示をする。

「坂上、ここではいけません。振り落として下さい」

「承知しました。揺れますのでご注意を」

運転士は頷きアクセルを踏む。

同時に車が左右に大きく振れた。

車の通りの多い場所だというのに、車は構わず加速する。反対車線に乗り出し、車の往来を妨げながら車通りの少ない山の方へと走っていく。どこからかサイレンの音が聞こえる。

一瞬、笑顔の男が少し顔をしかめたのが解った。がん、と激しい音がして車の天井から手が生えた。

「うわっ…………！」

「…………」

明弥は悲鳴を上げたが、男は動搖した様子を見せずに懐に手を入れる。

引き出されたものは拳銃だった。否、拳銃と言うよりも形はタンクの付いた小型の水鉄砲というところか。モデルガンの銃身にガラスタンクを取り付けたような造りをしている。ガラスタンクの中には赤いインクのような液体が入っている。

血のようだ、と明弥は思つ。

彼はそれを獣の手に密着させて引き金を引く。

しゅっ、と空気を切るような音。

赤いインクが一気に無くなつた。

獣がうめき声を上げた。

「な……？」

明弥が声を上げると、彼は片手でタンクを捻る。

「一撃では無理ですか。やはり丈夫ですね。坂上」

彼は何かを催促するように運転席の方に手を出す。

坂上と呼ばれた男が運転をしながら助手席にあるアタッシュケースを開くと、新しいガラスタンクを取り出し、彼に渡した。

「あの、何を……」

男は答えずに窓を開いた。

開いた瞬間息が出来ない様な突風が車内になだれ込んでくる。

彼は身を乗り出し窓枠に腰を下ろした。

先刻のような風を切る音と、獣の呻り声。

車内に入ってきた彼の手がもう一度坂上に催促する。坂上は先刻よりも少し薄い色の赤い液の入ったタンクを渡す。再び同じ音が聞こえた。やがて音と揺れを生じさせながら獣が「ロロロロ」と道路を転がっていくのが見えた。

明弥は視線でそれを追つた。

「！」

車が急停止する。

その勢いで明弥は助手席のシートに鼻先をぶつけた。

「降りて下さい」

「あ、はい」

男に言われ明弥はそれに従つた。

車の外にはタイヤが滑った跡と血痕のような跡が残されていた。

そしてその先には、

「つ……！」

明弥は息を飲む。

転がつていったはずの獣の姿が無かつた。代わりに、傷だらけで全裸の大男の姿。顔こそ見えないがその身体は紛れもなく人間のものだつた。彼の腕から血が流れていた。

意識が無いのだろう。男はその傷を手で覆うことすらしなかつた。

「まさか、死んで……」

「生きていますよ。ただ、良く利く麻酔のようなものを打ち込んだだけです」

(ようなもの？)

明弥は眉を顰めた。

と言つことは麻醉では無いのだろうか。

いや、そもそもこの男は誰で、あの獸と何の関係があるのでだろうか。これでは獸が男に変身したようにしか見えない。

そんなことが、あるのだろうか。

運転士が車から毛布の様な布を持ってきて大男の上に掛ける。

明弥は男を見上げた。

微笑んでいる顔の男の表情が僅か困ったような、悲しそうな色を帯びる。

「彼は私の弟なんですよ」

「え？」

「人狼です」

「ジンロウ？」

「狼男、と言つのが解りやすいでしょ？ 月の満ち欠けに左右される訳ではありませんが」

確かにこの状況を説明するのに、男が狼男だったと言われるのが一番しつくりくる。だが、俄には信じがたい。常識しか信じられないわけではないが、そんなのは都市伝説で現実にいるなんてとても思えない。

自分が芸能人であれば大がかりなどつきりを仕組まれたかと思うだろう。

それに、男が人狼ということは兄弟である彼も人狼だと言うのだろうか。赤い髪の男はともかく、この細身の男が狼になる姿は想像が付かない。

「彼は特殊な病気なんです。今、この状態で警察に捕まればもう一度と会うことは出来ないでしょ？」

明弥が言葉を理解するよりも、視線が交わるのが先だった。

今まで殆ど開かれていなかつた男の瞳が明弥の瞳を捕らえた。

「今のこと、見なかつたことにしてもらえませんか？」

久住明弥が発見されたのは繁華街から離れたバスの停留所だった。待合室のベンチにもたれ掛かつて気を失っているところを警察官が発見したといつ。

マスコミが狼か野犬かと騒ぎ立てる中、その獣に襲われた少年は病院に運び込まれた。どこからかぎつけたのか報道関係の記者達が渦中の少年にインタビューを取ろうと院内をうろついていたが彼の病室に辿り着くことは無かつた。

「小児病棟か。中津さんの指示だる。さすがだな」

勇気は病院のロビーで紙コップのコーヒーを飲みながらほっとしたように息を吐いた。

まだ人の多い待合室のテレビの中では街に突然現れた獣についての報道がされていた。さすがに獣の姿のVTRは無かつたが目撃者の証言から作ったイラストやイメージ映像が流されていた。一部の報道では監視カメラの映像が流れていたが、あまり鮮明とはいえないかった。

「そうですね、マスコミもこちらには入りにくいですからね」

並べられた長椅子に腰を下ろしながら伊東が同意するように頷いてみせた。

彼を小児病棟の方に入れると言つたのは中津刑事だつた。ちょうど現場に立ち合つた彼はこれが普通に野犬や狼に襲われただけの事件ではないと感づいたのだろう。報道管制を強いるにはまだ情報が足りないが、久住明弥をマスコミに晒すのは得策ではないと判断したのだ。彼が発見されたという報せを受けて真っ先にそう指示を出した。

患者も見舞客も様々な一般病棟よりも小児病棟の方が外からの侵入者に敏感だ。特にここは原則的に身内か入院患者の学校関係者と一緒にでなければ中に入れない仕組みになつていて。近年増えてきた

不審者の侵入が原因で出来たシステムだがこんなところで役立つとはまさか思つてもみなかつた。

勇気の母親の愛には「頭が鉛で出来ている」と言われるような刑事だったが、その点はさすがに判断が速い。

「勇気くんは彼と面識があるんでしたよね」

勇気は頷く。

「入試の時の一度きりだけ?」

「印象は?」

「大人しくて、トロトロで、真面目。いじめやカツアゲの被害者になりそうなタイプ」

率直に言つと伊東は軽く吹き出した。

彼は少し不機嫌に伊東を睨んだ。

「伊東さんも似たような感想なんだろ?」

「ええ、確かに概ねはそうですけど……」

「けど?」

「いじめの部分だけは同意できませんね。彼はいじめられるタイプじゃありません」

勇気は眉をひそめる。

ぱつと顔を見ればイジメの対象に成り得るか否かはすぐにわかるだろう。久住明弥は明らかに前者だ。勇気に久住明弥をいじめたいという衝動はないが、イジメる側の人間は目を付けるだろう。現に既に入試の時に絡まれている。

だが、伊東に「いじめられない」と断言されると奇妙な気がした。

「理由は?」

「色々とありますが、一番は彼をいじめてもつまらないと言つことですよ。話してみれば解りますが、どうします?」

勇気は警察の協力者であるものの、関係者ではない。事件関連の捜査目的ではなく友人として彼と会つか否かを問われているのだ。少し迷つたが勇気は首を振る。

どうせ彼とは四月から嫌でも顔を合わせることになる。先刻もそ

の理由から彼と会つのを止めると決めたばかりだ。

「やめとく」

「そうですか」

彼は頷いてコーヒーを飲んだ。

伊東はまだ中学生の勇氣に対しても丁寧な言葉を使う。刑事という職業柄、誰に対しても丁寧に接する癖のよつなものが付いているのだ。勇気が上司の息子だから特別というわけではない。

勇気が伊東に対してぞんざいな口を聞くのは幼い頃から見知った間柄だからだろう。年上の刑事に対してのしゃべり方ではないと思っていたが、今更口調を改めるのも他人行儀な気がして嫌だった。咎められれば治す努力はするが、伊東自身が気にしていないのだから今は必要無いだろうと思う。

「それよりも伊東さん、彼について詳しく調べた方がいい」

「では今回の件、無関係ではないと？」

「入試時のこともあるから、無関係とは言いにくい。……それに、途中から記憶がないなんて、とても信じられない」

突然獣が襲ってきた。彼が偶然あの場所に居合わせただけだとしても、車に連れ去られてから発見されるまでの間の記憶が無いなんて言われて納得が出来るはずがない。今は記憶が混乱して思い出せないとしても、車に乗り込んで、気が付いたら病院にいたという証言はお粗末すぎる。

その間に何かあり、それを隠しているとしか思えなかつた。

おそらく警察に知られるとまずい事情がある。

それが「こんな事を話しても、信じてもらえないだろうし、頭がおかしいのかと疑われる」という事情ならばいい。だがもし車の人物を庇う行為なら、彼自身が何か法に触れる様なことをして言い出せないのでならば問題は変わる。

入試の時に感じたように彼の能力が勇氣の思つている通りなら、自覚していてもしていなくても厄介なことに変わりない。

この世界は人の持つ特殊な力に関してあまりにも無知なのだ。

勇気は自分自身がそう言つた能力を持つてゐるため、この世界に科学で証明されていない超常能力といつものが存在することを知つてゐる。

その勇気から見ても、彼の存在は異質だった。

このところ頻発している「その類」の事件にも彼が関連している可能性もある。初めから全て疑つて掛かるわけではないが、可能性がある以上彼のことをこのまま放置してはいけないとthought。

「解りました。調べてみましょう」

伊東はそう言って手を出した。

勇気は空になつた紙コップを伊東に渡す。

「俺も爺さんに色々聞いてみる。俺より詳しいから」

「お願いします。アパートまで送りますよ。どちらにしても、愛さんの荷物を届けなきやいけませんし」

うん、と勇気は頷く。

がやがやとロビーが騒がしくなつたのはその時だった。

救急を知らせるサイレンを鳴らし、病院の前に救急車が飛び込んでくる。救急隊員が通路を確保し、なだれ込むように次々とストレッチャーで患者が運び込まれて来る。

伊東は視線だけで何が起こつたのかを聞いてくると合図を送つた。それに頷いて見送る。

不意に酷く嫌な感じがした。

叫ぶように医師に容態を伝える救急隊員の声の中に、火事という単語と十三人という言葉が混じる。勇気は慌てて待合室のテレビに視線を向ける。

先刻まで謎の獣に関して報道していた番組は緊急報道に切り替わつてゐる。

大規模な爆発事故が起つたと、テレビで報道されている。

それはこの病院からさして遠くない距離。運び込まれた患者が爆発事故に巻き込まれた人達であると嫌でも解る。

タイミングが、良すぎる。

(これじゃあ、まるで……)

まるで、久住明弥が関連したこの件を報道させないようにするために爆発事故が起きたかのようだ。犠牲者が久住明弥だけの事件と、犠牲者が十人を超えた爆発事故ならば、報道は間違いなくこちらの事件を報道したがるだろう。

(誰かが)

久住明弥を助けたという車の人物か、現れた獣に関連している人物か。あるいは、久住明弥本人か。

(何のために?)

自分を守るため、人を守るため、それとも利益を得るため?

何かが起こっている。

街の何処かで何かが浸蝕し始めている。

胸が酷くざわめいた。

嫌な予感がする。

こんなにも嫌な気分になつたのは四年前。小学生の頃だ。街が死の蝶に冒され人が死んだ。そして一人行方不明になつたまま今も見つかっていない。

あの時と似た何かが、今この街に巣くつている。

何かが。

1 安定を欠いた獣

酷い頭痛がした。

遠くで電子の音が一定のリズムを刻んでいる。それに会わせるようには頭がズキン、ズキンと疼くように痛んだ。

目を開くのさえ億劫になる頭痛。それは思考を鈍らせ、気を萎えさせる。夢うつつの中でも感じる痛みは古い記憶を呼び覚ます。鮮烈な痛みと共に浮かび上るのは初めて獣になつた時のこと。人の性が抜け落ち、本能だけが覚醒するように自分が誰であるかが分からなくなつた。

あの時頭痛と繋がった思考だけが自分の理性だった。今のこの痛みはある時の痛みによく似ている。

手放せば苦痛を感じなくなるだろう。

例え大切な誰かを手に掛けたとしても、痛むことはない。それが、獣としての彼の本性だった。

「……っ」

太一は意識をはつきりさせようと髪の毛をかき混ぜた。

髪の毛にしては太い何かが音を立てて彼の頭から剥がれる。

一定のリズムを刻んでいた機械音が警告音に変わる。複数の人間が慌てて駆け込んできたのが分かつた。

（ここは……研究室か）

うつすらと目を開くと、白衣を身に纏つた人間達がせわしく動いているのが見えた。

誰かの手が太一の手を押さえ込み、太い注射針を打ち込んだ。痛みは大したことがないが、反射的に動こうとする手を別の誰かの手が押さえ込んだ。

安定剤だ。

彼は判断する。

何度も経験しているから、自分が何をされたのかが分かる。彼ら

が、太一の痛みを和らげようとしているのが分かる。

だが、煩わしい。

太一は力任せに白衣の連中を払った。

このままでは、彼らを殺してしまいます。

頭を覆い、低く唸るように言い放つ。

「……イツキを呼べ！」

「私ならここにいますよ」

冷静な声が戻る。

目を開くと、白衣の研究員達の向こうからいつもと変わらない様子の男がいつもの笑顔で立っていた。

南条斎。

戸籍上では今自分の兄にあたる人物だ。見つけて、ようやく、頭の中に冷静さが戻つてくる。自分の凶暴な衝動も、彼ならば抑えてくれるという安心感があった。

頭を抑え、太一は尋ねる。

「……状況は？ 何があつた？」

意識が今ひとつはつきりしない。

何があつて今研究所にいるのがよく思い出せなかつた。自分は確か、久住明弥を「監視」するために出かけていたはずなのだ。

「あなたは街中で獣化しました。私がそれを保護しました。……ああ、あなた方はもう戻つて結構ですよ。後は私がやります」

斎に言われ、研究員達が返事を返して部屋の外へと出て行く。

徐々に戻つてくる感覚を支えに太一は上半身を起こした。ぶちぶちと身体に付いていた検査の為の線が抜ける。騒がしい電子音が切れたのは斎が電源を落としたからだらう。

太一は深く息を吐いて記憶を辿る。

（……獣化した？）

恐怖に怯えた少年の姿が脳裏をよぎる。

それは紛れもなく久住明弥を襲つた証拠だ。

「私が対処しなければあなたは殺していったでしょうね

斎は淡々とした口調で言う。

その口調から久住明弥が大した怪我もなく済んだことがわかる。

彼はほっと息をついた。

「……話したのか？」

「誰に？」

「久住明弥にだよ。あいつとあつたのか？」

「会いました。話もしました。最も今はこちらの事情を詳しく説明するわけにはいきませんでしたからね、簡単な説明をして納得して帰つて貰いましたよ」

太一は半眼で男を睨む。

「じゃあ、お前」

いいえ、と彼は首を横に振つた。

「私が‘説得’をするまでもありませんでした。彼はとても優しい子です」

「……馬鹿か、あいつは」

自分が殺されるかも知れない状況だったことを分かつているのだろうか。斎の介入が無ければ無事で済んだ自信がない。そもそも、意識的に獣化した時ならともかく突然何かに押されたように獣化した時には正気は保てない。

そう、太一は押されたのだ。

強い力に‘獣になれと’、背を押された。

だから簡単に正気を失つてしまつた。そうでなければ獣になつても人を襲わないように訓練してきた自分が襲うはずもない。人狼として人の世の中で生きていくことを選んだ自分が、簡単に自分を見失うはずがないのだ。

「イッキ

「はい？」

「大丈夫なのか？」

「何がですか？」

聞き返す斎に太一は唸る。

「質問に質問を返すなよっ！」

「あなたの言葉が足りないんですよ。それでは何に対しても聞いているのかわかりません」

太一は舌打ちをする。

頭の良い斎ならば太一が何を尋ねたかすぐに分かるはずだ。敢えて聞き返すのは相手に必要以上の情報を与えないためだ。太一に、という訳ではない。普段から、そうするように癖を付けているのだ。いつもそうだ。

慣れているはずなのに苛立つのは自分自身に不安があるからだろう。

太一は溜息をつく。

「……万が一にもお前の身に何かあれば、困るのは鈴華だ。街の方は騒ぎになつただろう？ 大丈夫なのか？」

「はい。警察がここに辿り着いたとしても強制捜査になるような証拠は残していません。それに、マスコミはそれほど騒いでいませんよ」

太一は顔を上げる。

獣になる瞬間を誰かに見られていなくとも、あの街中で太一は姿を晒した。少なくとも久住明弥を襲つた時に、他の人間の気配を感じている。彼の獣としての姿は狼だ。野犬と見間違われたとしても、少年が襲われたとなればマスコミは騒ぎ出すはずだ。

それほど騒がれていないとはどうしたことだろうか。

「爆発事故があつたんですよ」

彼を睨む。

「……お前がやつたのか？」

「まさか。いくら私でもうやむやにするためだけに人を巻き込んだりはしません」

どうだか、と太一は心の中で呟く。

斎は笑顔のまま続けた。

「このところ火事が頻発していますからね。その関連かも知れない

し、全く別の件かも知れませんが、大きな事故で犠牲者も出ました。
不謹慎ですが感謝しています」

大きな犠牲者の出なかつた事件よりも、何人もの犠牲が出た事件の方が人の興味を集めます。マスコミはより衝撃的な事件の方に動く。おそらく警察も火事の方を重点的に調べるだろう。

確かに不謹慎ではあるが、少しほつとしたのも事実だ。

「……心配なら自分の心配をしなさい、太一」

「うん、と太一は頷いて見せる。

「人狼がいるなんてマスコミが知つたら騒ぎ立てるもんな。気を付ける」

「そう言つことを言つてはいませんよ。あなたは今とても不安定になつています。薬で抑えていますが、いつ獣化してもおかしくないでしょ。変調があるならばすぐに私に言つて下さい」

斎は少し不安そうな表情を浮かべた。

「私は、あなたを殺したくはありません」

「イッキ……」

獣化した自分がどんなに危険か知つていて。

今回は何とかなつたが、殺さなければ止まれない状況になるかもしれない。万が一の時は斎が自分にどどめを刺すのだろう。そうなりたくないし、させたくもなかつた。

何だかんだと言いながらも太一にとつて今一番信頼できるのは斎で、斎にとつては太一なのだ。

物理面でも、精神面でも。

太一は目を閉じて頷く。

「……分かつた。何かあつたらすぐにお前に言つよ」

「はい、そうして下さい」

斎はほつとしたように笑つて見せた。

獣化することに不安なのは、太一だけではなく斎にとつても同じ事なのかも知れない。久しぶりに見た斎の不安そうな表情に少しだけ気持ちが軽くなつた気がした。

『……新入生代表、岩崎勇氣』

挨拶を終え彼は何度か形式的な礼をとつて壇上から降りてくる。入試で会つた時、頭の良さそうな人だと思った。総代をするくらいなのだから入試でも良い成績をだつたのだろう。第一印象は間違つていなかつたのだな、とぼんやり彼をながめる。

不意に視線がかち合つた。何故か睨まれたような気がしたが彼は何も言わずに段から降りた。

岩崎勇氣とは同じクラスになつた。

当然それは偶然なのだろうが、だからこそ何か縁のようなものを感じる。入試の時のことでもうござつたため同じクラスになれてちょうど良いともおもつていた。そんなことを友人や弟に話せば楽観的すぎると奢められるだろう。だが、明弥は勇氣に対して悪い印象を持つていなかつた。近寄りがたいような怖そうな印象はあるが、不思議と悪い印象は持たなかつたのだ。

入学式を終えて、教室に戻る人波に乗りながら明弥はぼんやりと別の事を考えはじめる。

トモミとは違うクラスになつた。折角同じ学校に合格出来たのに別のクラスになるのは残念だつたが、少しだけほつとしている。

彼女のことは好きだが複雑なのだ。

(こればっかりは僕自身の気持ちの問題だよね)

そう、トモミが悪い訳じゃない。少し前だつたら本気で同じクラスになれなかつたのを残念に思つていただろう。

だが「危険を引き寄せる体質」のこともある。それに何よりも、今気になつているのはバレンタインの時のこと。あの時見た人影。あれがそもそもの原因なのだ。

あの人影は……

「あつくん？」

呼びかけられてはつとした。

明弥はA組でトモミはB組だから近くにいるはずがない。遅れて歩いてしまったのかと周りを見渡すが、先刻見たばかりのクラスメートの顔がある。明弥が遅れて歩いていた訳では無さそうだった。

「どうしたの？ 何か暗い顔

「そんな顔してた？」

知らない振りをするように言つと、トモミは頷く。
彼女にはやつぱり筒抜けだ。

「悩み事なら聞くよ？ 家で何かあつた？」

「そんなんじやないよ。昨日パズルやつていて解けない問題があつたんだ。懸賞の付いているやつ」

ああ、と彼女は眉間に皺を寄せた。

「それじゃあ力になれないや。……ね、岩くんと同じクラスなんだね」

「岩崎くんのこと？ 総代の」

「そー。中学の時クラスメートだつたんだ。頭良いとは思つてたけど、まさか総代とはねえー」

彼女の視線の先には岩崎の姿が見える。

がやがや騒がしいためにこちらの声までは聞こえていないだろ。明弥は小声で尋ねる。

「……どんな人？」

「良い奴だよ、アレで結構話しやすいし。ただねえ」「ただ？」

トモミは腕組みをする。

「女の子にもてるからねー。あんま仲良くすると嫌がらせとか来るんだよね。その辺ちょっと問題？」「嫌がらせ、と明弥は呟く。

女の子達を怒らせた男子が痛い目を見ているのは知っているが、そんな風に嫌がらせをするようには思えない。男子一人のために。

「トモちやんは？」

「え？」

「ああいうタイプが好み？」

一瞬彼女はきょとんとした。

次の瞬間、まさか、と吹き出す。

「格好良いとは思うけど、私あつくんの方が好きだよ。むしろ友達とかになりたいかなー、あ、私クラスここだから」

彼女は入り口を差して言う。

明弥は頷いて彼女を見送った。

「じゃあまたねえ」

「うん、また」

手を振つて歩き出すと、すぐに別の女の子に話しかけている彼女の姿が見えた。彼女から貰うプリクラでも見たことのない顔だから新しい友達だろう。相変わらず友達を作るのが早い。明るく人懐っこい性格の彼女は誰でも気さくに声をかける。それが嫌だと言う人もいるだろうが、誰にでも分け隔て無く接する彼女の周りには自然と人が集まるのだ。

そういうところは見習わなければと明弥は思う。

おい、と声を掛けられたのはその時だつた。

明弥が振り向くと入試の時に会つた三人組がいた。もつとも、三人のうちの二人と言うべきだろうか。リーダー格ともう一人。三人目の姿が無いところをみると落ちてしまつたのだろうか。

「てめえ、クズのくせに女といちゃついてんじゃねーよ

どん、と肩をどつかれ明弥は少しバランスを崩す。

騒がしかつた周囲がしんと静まりかえる。

入学式を終えたばかりの集団が、興味深そうに明弥達の方を見ていた。これはやはり絡まれてているのだな、と思いつながらも明弥の頭の中は三人目の事で一杯になつていた。

あの事件のあと、まともに試験を受けられずに落ちたのなら少し責任を感じる。明弥が危険を引き寄せる体质なら彼らは明弥の不運

に巻き込まれただけなのだ。

トモミのお守りを捨てようとした事はまだ少し怒っているが、それとこれとは話が別なのだ。

「何とか言えよ、クズ」

「え？ ああ、あの、もう一人はどうしたの？」

「井辻は休みだよ、クズ」

リーダー格の男は律儀に答えてくれる。

口は悪いけどいい人だな、と明弥は微笑む。

「ああ、そななんだ。あのせいで落ちたのかと思つてビックリしたよ」

それにも入学式に休みなんて井辻つて人もついていないな、と明弥は同情した。これからクラス写真の撮影もあるのだから、その井辻は写真の上端に四角い枠の中に収められてしまうのだ。目立つていいつていう人もたまにいるだろうけれど、普通はあまり嬉しくないだろうと。

「てめえ、舐めてんなよ？」

「ええつと、ごめん、そんなつもりじゃないんだけど……」

「クズとか呼ばれて悔しくねえのかよ」

襟首を捕まれたが、苦しくは無かった。

「あ、ああ、そなか。何で名前知つているのかなとか思つてたけど、そな言つうことだつたんだ」

てつくり「久住」を省略して「クズ」と呼んだのだと思つていた。実際親しみを込めてそう呼ぶ連中もいたためにそれが罵倒語の一つであると認識するまでに時間がかかつた。

これは自分でもぼけていると思つ。

怪訝そうな男に明弥は言つ。

「俺、名前、久住明弥つて言つんだよ。だからクズつて呼んだんだなーつて……あれ、どうしたの？」

呆れた様子の彼を見て明弥は瞬いた。

また自分は変なことを言つただろうか。

「……お前、馬鹿か」

「え？ あ……えーと、多分」

中学のクラスメートにも良く言われた気がする。

馬鹿にされているというよりはからかわれている感じだったから
気にしていなかつたけれど、会うのが一回目の名前もろくに知らない
人にまで言わるとさすがに少し凹む。

成績云々の事を言つているのではないのだろうが、誰からも馬鹿
に見えるつての嬉しくはない。

彼は盛大に息を吐いた。

「……やめた」

「え？」

「お前に絡んでも面白くもねえ」

「えつと……ごめん」

申し訳ない気がして謝つたが、すぐに睨まれた。

「謝るなよ。……くそつ……調子狂うな」

彼は明弥の襟首を放し踵を返す。

いつの間にか廊下には先刻のざわめきのよつなものが戻つていた。
多分驚いたのは一瞬で、明弥たちの会話を聞いていた生徒はろくに
いないのだろう。

面白く無さそうに頭を搔く男に、もう一人が話しかける。

「よかつたんスか、安藤さん」

「いいもなにも、あんなの相手してもつまらねーよ

「まあ、それはそうですけどね……」

の人、安藤つて言うのか、と明弥は思つた。

安藤はC組の教室に入つていく。ともみと同じクラスなら、もう

一人の名前も後で聞けるな、と何となくほつとした。

名前も知らない相手の顔だけ知つているというのはどうも気持ち
が悪い。

悪ふつている感じだが、いい人そだだから、友達にもなれるだろ
うと楽観的に考える。

ふと、明弥は視線を感じ、振り返る。

A組の教室の出入り口の所で若崎が観察するようにこちらを見ていた。その視線がかち合つても若崎は逸らそつとしなかった。

「？」

首を傾げると若崎は不快そうに険しい表情をした。
何か悪いことをしたのだろうか。

「おーい、みんな教室に入れー！」

教師の叫ぶ声が聞こえて新入生達は慌てて自分のクラスに戻つていく。人混みに飲み込まれるように明弥もA組の教室に入った。

「岩崎くん、ちょっと待つて！」

既に最初のHRが終わっていたためにクラス写真を撮り終えるとそのまま解散となつた。親が入学式に参加した生徒は親と一緒に帰宅していつたが、やはり高校の入学式ともなるとわざわざ来ない家も少なくはないらしく幾人かの生徒達はまだ残り無駄話をしていた。明弥の親も入学式には出てこなかつた。

昇降口に向かう岩崎の側にも親の姿はない。おそらく彼の親も不参加だったのだろう。明弥が後ろから呼び止めると彼は一瞬振り返つたが、一瞥しただけですぐに取り出した靴を下に投げ落とした。不機嫌そうな彼は話しかけられるのも嫌そうに眉根に皺を寄せている。

他の生徒や教師達と話をしているのを見かけたが嫌そうな態度をとつてはいなかつた。こんな風にあからさまに嫌悪感を示した態度を取るのは明弥に対してもうただ。

やはり自分は彼に何かしてしまつたのだろう。

明弥はそのまま帰ろうとする岩崎の腕を掴んで引き止める。

「待つて、俺、何かした？」

じろり、と睨まれる。

やはり不機嫌そうだ。

「ごめん、何かしたなら謝るけど……」

「お前」

岩崎は顔だけ振り向いた。

二人の立っている場所には少し段差があり、明弥の方が高い位置にいる。それでも岩崎に見下ろされているような気分になるのは明弥よりも高い身長だけが原因ではないだろ。威圧感のようなものが彼の瞳にはあるのだ。

彼は静かな口調で言つ。

「馬鹿だろう」

「……うう、それ今日一度田」

明弥は口をへの字に曲げた。

先刻も同じ事を安藤に言われたばかりだ。多少自覚はしているが、やはり口に何度も言わると落ち込む。

「離せよ。伸びる」

「あつ、ごめん！」

明弥は慌てて彼の腕を放した。

服を直しながら岩崎は小さく息を吐いた。どこか観念したような表情。もう先に行つてしまふ意思は無さそうだった。

明弥は自分の靴箱からスニーカーを出す。彼はそれを見つめながら抑揚のあまりない口調で言つ。

「川上とは帰らないのか？」

明弥は頷く。

「トモちゃん親来ているから。……えつと、同じクラスだったって？」

「ああ」

言葉は少ないがちゃんと会話は交わしてくれるつもりらしい。

明弥は微笑んだ。

「岩崎くんつてやつぱりいい人だよね」

「馬鹿にしているのか？」

彼はあからさまにむつとした表情を浮かべる。

明弥は慌てて手を振つた。

「そんなつもりじゃあ……」

岩崎は腕組みを詩ながら鼻先で笑う。

「おめでたい脳だな。大体、いい人、は褒め言葉じゃない」

「うかなあ……」

「それで？」

「え？」

「こんな無駄話するために呼び止めたんじゃないだろう?」

何か気を悪くさせるような事をしたのなら謝りたいと思ったのは事実だ。けれど彼の言つようにもう一つ目的があった。色々と聞きたいことがあるのだ。自分に忠告してくれた彼だから知っている気がするのだ。

明弥は歩き始めた勇気と並んで歩く。

熱心な部活の勧誘の先輩達が配るビラを受け取りながら行くと自然と一步遅れる形になつた。岩崎は差し出される一切を無視して歩いていく。

「入試の時の事で聞きたいことがあるんだ」

「……」

後ろからでは彼の表情が見えないが、返事はなくとも聞こえていいるはずだ。明弥は目の前に差し出されたビラを全て受け取りながら小走りに彼に駆け寄りながら続ける。

「岩崎くんなら知つていてるでしょう?俺、自分が危険な目に遭うのはいいけど、誰かを巻き込むのは嫌なんだ。だから……」

岩崎は僅か振り返つた。

嫌そうな表情をされて一瞬尻込みをする。

だが、引くわけにはいかない。これは自分だけの問題じゃない。解決出来る手段があるなら何でもする。だけど、それには情報が少なすぎる。あの時何故岩崎は自分に忠告してきたのか、その理由を知りたかった。知れば何か解決の糸口が見えてくるかもしね。少なくとも、何もしないでただ嘆いているよりはずっとマシだ。

「始めて言つておく」

彼は睨むような目つきで明弥を振り返つた。

校門を出る少し手前で立ち止まつたために目の前に差し出された弓道部の勧誘のビラを受け取る形になつた岩崎は小さく舌打ちをした。明弥も弓道部のビラを受け取り束になつた紙を軽くまとめる。

「俺は、お前がシラを切つてている可能性がゼロじゃないって考えてる。むしろ状況証拠から見ればお前が意図的にやつたと考える方

が自然だ

「それって……」

どういう意味、という言葉は吹奏楽部の演奏にかき消される。

頭の良い進学校なのに何故こうも部活動が熱心なのだろう。

岩崎は校門の外に向かつて歩きながら少し怒鳴るような声で言つ

た。

「それでもいいなら、……それで満足するなら、俺が見たこと全部話してやるよ」

「本当? 話してくれるの?」

「ともかく、来いよ。ここじゃあまともに話も出来ない!」

彼は片耳を押さえながら苛立つように吐き捨てた。

確かにここじゃあうるさすぎて会話もまともに出来ない。

明弥は頷いて紙束を鞆の中へと詰め込むと彼の後に続いた。

学校から離れ彼の後を歩くと騒がしい人の気配は消え、代わりに車が行き交う騒音が響き始める。西ノ宮高校から駅方面へと向かうとどうしてもこの大きな道路を渡ることになる。歩道橋を上がり大通りを渡ると駅前の大型のショッピング街になる。

バレンタインの日に事故が起きた場所も、赤毛の獣に襲われた場所も全てそのショッピング街で起こった事だ。

ちらりと横目で見やつて少し重い気持ちになつたのは純粋にあの時のこと思い出したからではなく、岩崎がいるからだ。万が一にも彼を巻き込むことになつてしまえばとすると気持ちが落ち着かない。彼まで巻き込むことになつてしまつたら、もう怖くて誰とも一緒に出かけられなくなるだろう。

それを解決するために、岩崎に声を掛けたといつに。

明弥は不安な気持ちを払拭するように頭を振つた。

「どこまで行くの?」

「珈琲屋」

「えつと、ドール?」

「いや、オレンジ色の猫のマークの」

「ああ……あの店。ああ、そうか、珈琲屋」か
明弥は納得したように頷く。

「コーヒー屋と言われたから大雑把な言い方をすると思ったが、そ
うでは無かった。駅前の大通りから一本外れた道にある、‘珈琲屋 o
range 猫’、という店があるのだ。その辺のカフェと違つて学生
の自分にはちょっと敷居の高いイメージのある店だ。ガラスにオレ
ンジ色の猫のマークが描かれていて印象的だったから覚えていたが、
そうでなければコーヒーに興味がない限り素通りしてしまう店だろ
う。

「コーヒー好きなんだ？」

「知り合いの店だ」

「ああ、それで」

明弥は頷いた。

地元の人間じゃなければあまり通らないような人通りの少ない道
を抜けて、やや賑わいのある道へと出る。確かにこの通りに珈琲屋
があるはずだ。

当然曲がると思っていたが、岩崎は何喰わぬ顔でそこを通り過ぎ
る。

「……？」

「久住」

岩崎は近くに来いと言うように指先を軽く動かした。
指示通りに明弥は彼の横に駆け寄る。

「振り向かずに歩け」

「え？」

反射的に振り返りそうになるのを堪えて彼の横顔をじっと見つめ
た。

険しい表情をしている彼は視線だけを明弥に向ける。
「尾行られる」

4 願つたこと、叶わないこと

尾行？

誰が、誰を？

明弥は戸惑つたまま瞬いた。

「校門を出たところからずっと後を付けてきている。ガラスに映つたのを確認した」

岩崎は声のトーンを落として言つ。

「……次の角で曲がる時に出来るだけ自然に振り返つて確認しろ。左側にいる灰色の服を着た男だ」

明弥は半信半疑のまま、道を曲がる瞬間に何気なさを裝つてその姿を確認する。

視線が交わつた。

何か後ろ暗いことがありますと言わんばかりにあからさまに視線を逸らされる。

岩崎の言う通り、灰色の服を来た男だつた。一瞬見た印象では三十代半ばか後半くらいだろう。多少ガラの悪そうな男に見えた。見覚えはあるか、と岩崎の視線が尋ねる。見覚えが無いと視線だけ答えた。

一瞬だけでは分からぬが、少なくとも彼が覚えている範囲内でも知り合いでない。

彼がやや歩調を早めた。明弥はそれに合わせるように多少小走りになる。

後ろの男を意識して小声にしながら明弥は問つ。

「ほ、本当に付けてきているの？」

「確かめて見るか？」

「……うん」

頷くと、岩崎が走つた。

明弥も続くと、やはり後ろの男も弾かれたように走り出した。それはこの街中を歩く人にしてみれば不自然な反応。駅方面に向かって走っているのならば、電車に乗り遅れる事に気付いたという理由で走るのは頷けるが、彼らが向かっているのは駅とは逆の方向。尾行されているという岩崎の言葉は間違いないようだ。

不自然に思われても見失うよりはマシだと思ったのだろうか。明弥達が気付いたことが分かったのかも知れない。もはや彼に隠れている意思は感じられない。

男の様子を窺うために振り向いた瞬間だった。

「久住！」

岩崎が注意を促すように叫ぶ。

「え？ ……わっ ……あつ！」

気が付いた時には遅かった。明弥は勢いよく何かに激突する。衝撃は自分の身体に跳ね返り、ぶつかつた力と同じ力で跳ね飛ばされる。転倒を覚悟して彼は目を瞑る。

転倒はせず、代わりに腕に力がかかった。誰かが声を上げる。

「……つと、悪い、大丈夫か？」

「……？」

明弥は目を開いて瞬いた。

「え？ あれ？」

男が片手で明弥の身体を支えていた。一メートルはありそうな偉丈夫だ。あの狼を連想させるような赤い髪の男だった。

（……まさか）

あの人では無いだろうか。

あの時、路上で倒れていた人狼の男。

あの時顔は見えなかつたが、体つきがよく似ている。

まさか、と明弥は心中でもう一度呟いた。

赤毛の大男と言うだけの特徴で勝手に決めつけるのは失礼だ。こんな大柄な人はそんなにいないだろうが、全くいないわけではない。大体、あの人人が普通に出歩いているのだろうか。あの人人は、お兄さ

んが「保護」したのだ。

「太一くん、どうしたの？」

男の後ろ側で洋品店の自動ドアが開く。彼の半分以下の印象を受けるほど小柄な少女が男を見上げる。

男は優しそうな顔で微笑んで明弥を示す。

「ん、こいつと不注意でぶつかつたんだ」

「身体が大きいんだから気を付けないとダメよ」

「面白い」

少女に窘められ、男は苦笑を混じらせながら言う。
しつかり者の娘という感じだろうか。外見的には政志と同じか少し下という感じだが、大人しそうでずっと大人びてさえも見えた。おさげが印象的な可愛い子だ。

彼女はにこりと微笑んだ。

その表情がまるで同年代の女の子に微笑まれたかのような錯覚を覚え、一瞬自分が今尾行されていてそれから逃げようとしていたことを忘れた。

「ごめんなさい、怪我ありませんか？」

ドキリとした。

弟と同じくらいの女の子を恋愛の対象になんか見たことがない。けれど彼女の表情があまりに大人びていて驚いたのだ。

明弥は一拍置いて答える。

「あ、うん、大丈夫……」

「おい！」

岩崎が慌てたように明弥の肩を引いた。

瞬間に現実を思い出した。

振り向いた先で追いかけてきていた男と視線が混じる。こちらに向かって走ってきた男だったが、明弥と顔を合わせる形になつて戸惑つたのか動搖した素振りを見せた。或いは明弥の後ろに立つた大男に驚いたのだろう。

男は踵を返した。

岩崎が動く。

逃げるよう走り出す男を追いかけるように彼は走った。

ひゅうと、大男が口笛を吹く。

「おお、俊足」

狭い路地に入り込んだ男の襟首を岩崎が掴む。

大通りには人が行き交う姿があつたが、狭い路地で繰り広げられていることに気が付かないのか見向きもせずに素通りしていく。たまに振り向いた人がいても、一警しただけで面倒なことに巻き込まれるのを嫌つてかそのまま早足で通り過ぎていった。

明弥が路地を覗き込むと男がもがき、反撃をするとこりだつた。

「岩崎く……」

「止めとけ、お前じやあ足手まといだ」

彼を助けるために走りかけた明弥は太一と呼ばれた男に制され止まる。

男を見上げると顎をしゃくつて見るよう促す。明弥は慌てて視線を岩崎の方へと戻す。

岩崎は強かつた。

ケンカ慣れをしていると言つよりは、格闘技の経験があるような動きだつた。身のこなしに一切の無駄がなく、冷静に見つめる眼差しには余裕さえも見て取れた。

繰り出された拳を岩崎は難なく交わし、足を大きく振り上げた。勢いよく振り下ろされた瞬間、男の身体ががくんと沈む。

踵落としだ。

格闘技系の番組でくらいしか見たことがない。

確かに明弥が近くに行けば逆に足手まといになりそうだ。

「凄い」

女の子が呟く。

同感だつた。

生徒総代になるほど頭が良く、見た目も格好良い。その上強いともなれば彼は完璧だ。凄いと言つ以外に感想がもてない。

「この、クソガキが！」

岩崎の足下に蹲つた男が起きあがつた。

手元にぎらりと光るモノが見える。

「危ないつ！！」

明弥は叫ぶ。

原でいぐれす立派をもいぐ歸った。

自分のせいで誰かを巻き込

を望んでいた。

て
る。

うるさい、うるさい。

何故今刃を向けられているのが自分ではないのだろう。

平穏な生活。

そんな当たり前の生活すら、望めないのだろうか。

5 狂氣の刃

「子供相手に刃物とは良い度胸をしてんじゃねーか」
からん、とアスファルトに金属が落ちる音を聞いて明弥は目を開く。彼の一からは太一の背中と怯える男の姿しか見えなかつた。今まで太一は自分の後ろで成り行きを見守つていたはずだ。いつの間にあんなところに移動したのだろうか。

明弥は慌てて近付いた。

後方から少女が小走りで付いてくる気配を感じた。

「仮にガキ共が万引きしたとしてもな、刃物を出した時点でお前が悪い」

「ひつ……」

ガラの悪そうな男は息を飲んだ。

男も消して小柄な男ではなかつた。だが、太一と並ぶとまるで子供のように見えてしまう。三十代くらいの男だ。顔にはやはり見覚えがない。

岩崎は涼しい顔で男を睨んだ。

怪我をしている様子はなく明弥はほつとした。

「……万引き？」

「してないよ」

少女の咳きを聞いて明弥は慌てて否定する。

冷ややかな口調で岩崎が問う。

「お前、何で俺たちの後を付けた？」

「何だ男子高生をストーカーか？ 隨分な趣味だな」

太一は低く笑う。

「ち、違う。俺は頼まれただけだ！ そいつを監視しろって

明弥は自分を指差されびくつとする。

監視？

どうして？

「誰に頼まれた？」

岩崎が尋ねる。

「……」

男は答えなかつた。

苛立つたように太一が男の頭部を掴み引きずるようにして壁際に押しやつた。

ちょうどビルの一階に上がるための階段通路だ。周囲からは死角になつて見えなくなる位置で男の頭部を壁に押しつけながら脅すようく低く唸る。

「誰に、頼まれた？」

「し、知らない！」

「とほけるなよ？ 知らねえで済ませられる問題じゃねえ」

男は刃物を出したのだ。

それで知らないで済まされる問題ではないことを明弥にも分かる。だが、壁に押しつけられて怯えている男の姿を見ると不憫にさえ思えた。岩崎にナイフを突きつけたのは許せない。だからといって怯える男をなおも脅す理由にはならないのでは無いだろうか。

（だつて、本当に知らないのかもしれない。それに）

明弥はちらりと女の子を見る。

こんな小さい子に暴力シーンを見せて良いのだろうか。彼女は無言のまま成り行きを見守つていたが、これが傷になつてしまつかもしれない。

「本当に知らないんだ！ 男に金を渡されて、こんなヤバイガキなんて思わなかつたから、それで……」

男の発言はまるで明弥が岩崎と太一を従えていると誤解しているような言い回しだつた。もちろんそんなわけが無いのだが、そう誤解されてもおかしくない状況だと気が付く。明弥が一人に守られた形になつたのは事実だつた。

「どんな男だ？」

「み、右手に、傷のある……男」

「傷？」

男は強い力で押しつけられて、苦しそうに言つた。

「やけどの……跡」

太一は眉をひそめる。

明弥はたまらず彼の衣服を掴んだ。

「もういいです」

これ以上は、もういい。」のままだと彼が男を殺してしまいそうで怖かった。

明弥は拒否するように頭を振つた。

「十分ですか？」

「十分つてお前なつ！」

太一が吠える。

彼が明弥を振り向いた一瞬の隙を狙つて男が彼の腕から逃れた。慌てて捕まえようとする太一の腕をすり抜け、男が地面に落ちたナイフを拾い上げる。

激しい感情で歪んだ男の視線とかち合つた。
避けようと思えば避けられた。

だが、明弥はその場から動けなかつた。

身体の奥底から何かが吐き気のようにこみ上げてくる。
もう、止めてくれ。

「久住！」

岩崎が叫ぶ。

刺されたら死ぬだろうか。

不意に力が抜ける。

正直、もうどうだつていいと思つた。

立て続けに色々な事が起こつた。それで混乱したせいもあるだろうと思うが、自分が原因で周囲に迷惑を掛けているのならいつそ死んでしまつた方が楽なような気がしたのだ。

それに、

「止めて！」

少女の叫び声。

明弥は我に返つた。

瞬間的に恐怖が蘇る。

「あ……」

目の前に迫る刃が、

「！？」

跳ね飛ばされるようにして消える。
変わつて赤が視界に入つてくる。

全身に赤い毛を生やした人型の獣。

その顔は、紛れもなく

「……太一くん？」

少女が戸惑つた声を上げる。

明弥も悲鳴を上げそうになつて口元を押された。

氣のせいなどではない。今、目の前で太一が獣の姿に変化しそうになつてゐる。いつだつたか見た映画のワンシーンのように、男の全身から吹き出すように赤い毛が生えてくる。その身体が、顔つきが、徐々に狼のようになつていく。

「ぐ……ああつつ！」

苦痛にさいなまれるようになつて彼が呻り声を上げた。

「ひつ……」

彼に跳ね飛ばされた男が尻餅を付いたまま後退していく。
何が起こつたのか、理解したくなかった。

あの時の「人狼」に目の前で人間が変化しようとしている。夢でも見ているのではないか。人がこんな風になるなんて、信じたくない。

い。

ぱり、と音を立てて衣服が破れる。

丈夫そうな革のジャンバーがいともあつさりと引き裂かれる。

獣の鋭い視線が明弥の方に向けられる。

まだ人の形の残る男の唇が、ゆっくりと動かされた。

「太一くんっ！」

「止せ、行くな」

少女が太一の元に走り出しそうになるのを岩崎が止めた。

「でも……」

「お前の知っている、タイチくん、と少しでも違うなら、近付くな！」

鋭く言われ少女は唇を噛む。

太一は苦しそうに頭を押さえ、呻き声を上げている。

必至に自分を押さえつけているように明弥には見えた。

ようやく立ち上がった男が、半分這うようにしながら走り去ったのが見えたが、今はそれどころではない。

大通りの方からざわめきが起ころ。

ようやく事態の異常さに気が付いたかのように入だかりが出来ているが、むしろそれは危険と分かっているのではなく、興味をそそられているだけだと分かる。所々で携帯カメラの撮影音が響いてくる。

ざわめきの中から映画や撮影という言葉を聞き取る。

確かに、事前に同じ獣に遭遇していなければ、男が狼に変身する姿など現実だと信じられなかつただろう。だが、明弥がそれが特撮の撮影でないことを知っている。

「久住、逃げるぞ」

「逃げるつて……でも」

岩崎は明弥の肩を掴んで小声で囁く。

「この辺には警察がいる。万が一の時には俺たちよりも上手く対処してくれる」

「警察？」

「ともかく、行くぞ。お前もだ」

言われ少女は頷いた。

岩崎は携帯電話を確かめて、次いで太一の様子を振り返った。太一は頭部を抱えながらよろよろとこちらに近付いている。必至に何かと戦っているように見えた。

「ばしゃ、と岩崎がアスファルトに何かをまいた。

手元にはミニネラルウォーターのペットボトルが握られている。赤毛の男と自分たちを隔てるように、道路上に水で一本の線が引かれた。

引かれた線から何か青白い光が陽炎のように揺らめく。

「……？」

「簡単な目眩ましだ。どの程度利くか分からない。アレが全力で追いかけてくる前に安全な場所まで逃げる」

訝る明弥に岩崎は説明を加える。もつとも、その説明を聞いたところで明弥には彼が何をしたのかが理解できなかつた。

彼は歩きながら携帯電話に耳を当てる。

明弥はその後に付きながら少女の手を握つた。

「俺です。説明は後ほど、用件だけ伝えます。駅前オレンジの……」

2 - 3 - 3

彼は電信柱にかかつたプレートを確認しながら言ひ。どうやら電話の相手に場所を知らせているらしい。

「はい、事件です。……いえ、俺は神社の方に。……そうです、願いします。……はい、そちらもお気を付けて。……タクシー拾うぞ」

電話を切つた後すぐさま彼は明弥達を振り返つた。

どうなつているか分からないが、今は彼に従うしかないと思つた。どつちにしても明弥にはどうして良いのかが判らないのだ。なら、少しでも把握していそうな彼に指示を仰いだ方がいい。

少女もまたそれに不服は無いらしく大人しく彼の言葉に従つた。目の前で知つてている男が突然獣の姿に変わり始めたのだ。混乱していてもおかしくない。だが、彼女はそのことに関して混乱してい

る様子は無かつた。おそらく、彼女は彼が「人狼」であることを知つてゐるのだ。明弥を助けてくれたの人と同じように、彼女もこのことを知つてゐる。

けれど何かいつもと様子がおかしい。彼女の様子から、普段は獣となつてもこんな風にはならなかつたのだろつと思ひ。

だから岩崎に従つてゐるのだろう。

駅前に着くとタクシー乗り場に行く前に彼はタクシーを捕まえる。少し不審そうにドアを開けた運転手にタクシー チケットを手渡し彼は指示通りに進むように言ひ。

少女を挟むようにして後部座席に乗り込んだ学生一人を不審そうに見ていた運転手だつたが、鬼気迫るような岩崎の表情に大人しく頷いた。

「……その先左折、その次の信号も左折」

「それならこの先の広場でじターンした方が早……」

「言つようには進んで下さい。お願ひします」

運転手は不可解そうに首を傾げたが、彼の言つよつに進み出す。彼の指示は目的的に早く着くルートではなかつた。まるで道に迷つてゐるよう何度も似たような道を進んでいる。

明らかに効率が悪い。

「……何やつてゐるの？」

少女が不思議そうに尋ねる。

「遁甲だ」

「トンコウ？」

「さつきも言つたけど、簡単な遁甲ましだよ。あの男、……彼が俺たちを追いかけにくくしてゐるんだ。……ああ、そこは右折です。その先直ぐ。……日と時間がいいから今回は上手く行くが本来はこんな簡単にはいかない」

明弥は後ろを振り返る。

前に彼に追いかけられた時には猛スピードで接近してくる赤い影が見えた。しかし今日はそれがない。それどころか、騒ぐ人の気配

すら感じなかつた。

岩崎は少しだけ表情を緩める。

「無理に信じなくても良い。分かる必要もない。ただ、安全に進む方法なのだとthoughtていればいい」

「岩崎くん……」

彼はちらりと女の子を見て、次いで明弥を見据えた。
その視線は鋭いが恐ろしくは無かつた。

「お互いに聞きたいことも、確かめたいこともあるはずだ。だが、まずは目的地に着くのが先だ。遠回りになるが、それでもあと十分くらいで着く」

岩崎は身を乗り出して運転手に次の指示をする。

「……次の信号左折、そのまま真っ直ぐ山の方へ」

特殊な客に少し楽しくなってきたのか運転手は威勢良く返事をする。

こんな風に無茶なルートを指定する客なんて今までにいなかつたのだろう。イライラして怒り出すような運転手でなくて良かつたと思つた。

いつも言つとこひは恵まれているのだと明弥は思う。

自分の身の回りで他人が聞けば不運としか思えないことばかり起つるけれど、明弥はその分人に恵まれている。いい人なんて言えばまた怒られそうだが、運転手も岩崎もやっぱりいい人なのだと彼は思う。

そして彼女も。

明弥はちらりと隣を見る。

握つたままの少女の手が少し汗ばみ震えているのが分かつた。

「大丈夫?」

声を掛けると少女は微笑む。

「はい。平氣です」

控え目だが、明るい笑顔。

この状況には似つかわしくない。

それでもほっとしてしまつよつた力が彼女の笑顔にはあつた。

「そろそろ着くぞ」

岩崎が言つ。

いつの間にか木々の多い静かな場所まで来ている。
タクシーはその中でも一際木の多いところで停車する。すぐ脇に、
赤い鳥居が見えた。

「……神社？」

少女とともにタクシーを降りて、鳥居を見上げながら明弥は呟く。
運転手に礼を言つて降りてきた岩崎が横にならんだ。

「岩崎神社だ」

「岩崎つて……」

彼は肯定するように首を縦に振つた。

「ここは俺の先祖が代々宮司を務めている

神社の拝殿の脇を抜けると、そこには道場のような建物があつた。ここで神事の時に奉納する舞の練習などをするのだと岩崎は言つ。彼に促され道場に入ると暖かいような空氣を感じた。木々の覆い茂る神社の敷地内は他の場所より少し温度が低い。四月の暖かい気候とはいえ、少し肌寒さも覚えるほどだ。それに比べてこの建物はまるで暖房か床暖房のようなものが入っているかのように暖かだつた。建物や床は古く黒光りをしていてとても床暖房が入っているようには見えなかつた。

妙な暖かさに違和感を覚えながらも中に入ると岩崎が入り口に何かを貼りつけたのが見えた。

お札のようだ。

それも彼の言つ「遁甲」の一つなのだろうか。疑問には思つたが、尋ねなかつた。今はそれよりも聞きたいことが山ほどあつた。

「まずは聞きたい」

座るように促しながら岩崎が少女を見る。

彼女は南条鈴華と名乗つた。獣の男、南条太一とは兄妹なのだと言つ。

「君は彼が……人とは違つことを知つていたのか？」

彼女は頷きながら座る。

明弥もその近くに座る。練習場ということもあってか座布団も無かつたが、床はやはり妙に暖かい。床に直接座つても冷える印象はまるでなかつた。

「はい、知つています。でも、あんな風に突然変化したのは初めてでした」

「苦しんでいたのはいつもの事か？」

「いいえ。見たことありません。いつも太一くんは自分の意思で変

化していたし、自分の意思を失うなんてこと……ありませんでした」「どうして急に、と鈴華は視線を落とした。悲痛そうな表情で俯いた彼女に明弥は掛ける言葉もなかつた。

岩崎はそんな彼女を静かに見つめながら思案するように口元に手を当てた。

彼は驚くほど冷静だ。明弥は太一の兄を名乗る男から説明を受けたから、突然変化した太一を見ても冷静でいられたが普通こんな風にはいかないだろう。

神社の関係者というのはこういう現象に慣れていっているのだろうか。それとも、彼だけが特別なのだろうか。

明弥はじつと彼を見つめる。彼はやがて静かに明弥を見据えた。「多分、久住が原因だろ？」「えつ？ 僕！？」

突然自分に振られて明弥は頓狂な声を上げた。
明弥は慌てて言い直す。

「あ……えつと、俺が原因って……」

「入試の時もそうだった。お前を中心に不可視の波のようなものが

出た」

「不可視の、波？」

尋ねると岩崎は頷く。

「限りなく靈体に近い波。外部に向けて勢いよく放たれる、オーラと言つた方が分かりやすいか？ 厳密には違うがそれに似たものだと認識してくれればいい」

オーラと言わればんやりと納得する。

「不可視なのに岩崎君には見えたの？」

指摘すると彼は少しだけ眉根を寄せた。

「俺のことはどうでもいい。問題はその波だ。その波に影響されるように入試の時は水道管が破裂し、今回は彼が変化を起こした」

「……他人に影響する力……インパクト」

少女がぽつりと呟いた。

岩崎が鈴華の方を向く。自然と明弥も彼女の方を見た。

「お前、何か心当たりが？」

少女は頷く。

「聞いたことがあります。他人の潜在能力を引き出す力です。爆発のよう起きこり、他人に影響を及ぼす力なので、インパクトと呼ばれていると」

不可解そうに岩崎は眉をひそめた。

「何故君がそんなことを？」

「私の兄が……そう言つた能力を研究しているんです」

「兄というと先刻の？」

鈴華は首を振る。

おさげが左右に揺れた。

「違います。上の兄、斎です」

「あ、その人、こついう髪型で……スーツの似合う優しそうな人？」
身振りで説明すると少女は驚いたように目を見開いた。

少し驚き、警戒するような素振りを見せる。

「そうですが……兄を知つていてるんですか？」

「前にも太一……さんに襲われた時に助けてくれたんだ。名前聞きそびれてどうしようかって思つていたんだ」

「そうなんですか？」

少女はほつとしたように微笑む。

岩崎が睨むように明弥を見た。

「……なるほど、覚えていないと「このはやっぱり嘘か」「え？」

呆れたように岩崎は息を吐く。

「お前、警察に覚えていないと言つただろう。車に乗り込んでからのこととは良く覚えていない、気付いたら病院にいた、それは嘘だつたんだな」

「え？ ええ？ どうしてそんなこと」

あの時のこととは誰にも言つていなければ。警察に事情を聞かれ

たことすら嫌でも事情を知つてしまつた家族にくらいしか話をしていない。何故詳しいことまで彼が知つてているのだろうか。

彼は少し首を傾げる。

「お前色んな刑事に聞かれただろう。その中にいなかつたか、岩崎」という女の刑事」

確かに病院で意識を取り戻してから色んな警官に入れ替わり立ち替わり同じ事を何度も聞かれた。その中に確かに岩崎と名乗つた女刑事がいた。小柄で若い女性なのに刑事なのだな、と強く覚えていたのだ。

考えて見れば同じ岩崎だ。

岩崎なんて苗字は珍しくない。けれどこんな言い方をすると言つことは血縁なのだろう。そう言えればどことなく雰囲気が似ているような気がした。

「あ、あれ、もしかしてお姉さん？」

「母親だよ」

「ええっ？ あの人まだ三十台前半くらいだったよー？」

驚愕した明弥の声に恥ずかしくなつたのか、岩崎はそっぽを向く。「……俺の母親のことはどうでもいい。嘘を付いたこともこの際置いておこう。問題はこれからどうするか、だな。……聞くが、彼はどうやって人の形に戻る？」

「自分の意思で、です」

鈴華の答えに岩崎が頷く。

「今回の場合人の意思を失つていて。つまり正気を戻させるか、気を失わせない限り、彼を人の形に戻す手段はない」

「そんなの、どうやつて？」

足の速さも、腕力も、人を遙かに凌ぎ簡単に意思を失わせならない事を経験から知つていて。明弥達の力だけでどうひつ出来る相手ではない。

「それを今考えている」

岩崎は厳しい顔で答える。

明弥も難しい顔で考え込む。

(……斎さんなら)

彼なら出来る。

連絡先なら鈴華が知っているだろ？

(だけど、それはダメだそれは最後の手段……)

あの日、別れ際に言ったのだ。

彼に使った麻酔は強いものなのだと。今回は大丈夫だつたけれど、頻繁に使うことがあれば命に関わることさえ出てくる、と。

だからダメだと明弥は思う。

彼が人でなくとも、例え自分を襲つてくる相手だとしても、死なせていい、危険な目に遭わせて良いなんて言う理由になんてならない。

どうすれば良いのだろう。

斎に連絡を取つて最良の手段を考えて貰うのが一番いい。けれど、もしもあの薬を使う事が最良なら、太一が危なくなる。明弥達の力で何とか出来るならそれに越したことはない。

優しそうな人だと思つたのだ。

外面は厳つく怖そうな印象の人だつたが、鈴華を大切にしていたし、出会つたばかりの明弥を庇つてくれるような人だ。獣の姿は怖いけれど、どうでもいいなんて思えなかつた。

(やっぱり斎さんと連絡を……)

決めるのは自分だろう。

岩崎の方が冷静で決断力もあるだろ？が、彼は巻き込まれただけだ。鈴華はまだ小学生で、太一の妹。彼女に決めさせてはいけない。今、選択すべきは自分。

だけど、分からない。

何が正しいのか、最良なのか。

何も分からない。

ピリリリ、と不意に携帯電話の電子音が鳴る。

明弥はぎくりとして顔を上げた。

鳴っているのは折崎の携帯電話だ。彼は携帯電話を見つめたまま一向にその着信に出ようとはしない。

「出ないの？」

「……出る、しかなこよつだな

「？」

意味が分からず明弥は首を傾げる。

彼は顔をしかめたまま携帯電話を耳に押し当てる。

「…………はい」

岩崎は間を置いて声を発する。

相手は誰なのだろうか。

訝しがるような彼の表情は変わることが無かつた。短く確認するように返事をし、必要最低限の事しか話していないように聞こえた。

鈴華も不思議そうに彼の様子を見守っている。

やがて岩崎は携帯電話を明弥の前に突き付ける。

「久住、お前に電話だ」

「俺に？」

出で、と促されて仕方なく明弥は携帯電話を受け取る。

岩崎の携帯に電話をかけてきた相手が、自分に用があるとはビックリする事だろうか。まさか、警察の関係の人なのだろうか。

携帯電話を持ち慣れていないせいか、何処か変なボタンを押してしまったので余計に緊張をした。

「もしもし？」

声をかけると聞いたことのあるような声が戻ってきた。

『明弥さん？』

「あ、はい」

『水守祐里子です』

「えつ……あ？ 水守さん？」

名前を言われて一瞬のうちに誰なのかを思い出す。バレンタインの日、明弥が病院まで付き添つた女の人だ。「一度だけ助けてます」と電話で言われたきり連絡がなかつたからすっかり忘れていた。

岩崎と知り合いなのだろうか。だとしたら何故今自分が一緒にいることを知っているのだろうか。

混乱していると向こう側から笑うような声が聞こえる。

『私の助けが必要だと思ったから連絡を差し上げました。そこだと

携帯電話が一番いい媒体だつたから利用しただけですよ』

「えつと……意味が分からんのですが」

水守はくすりと笑い声を上げた。

『あまり長く介入していると術者に負担をかけるから手短に言います』

「はあ」

『‘引いてダメなら、押してみろ’』

「はい？」

『占星の結果です。本当ならそつに行つてあげたいけど、今仕事中なので。多分、言葉だけでも役に立つと思うのだけれど』

前の時と同じだ。

彼女の言葉は今ひとつ分からない。

けれど何故だろう。

それが意味のある言葉に聞こえる。

『先刻の彼、多分彼なら』

ふつ、と突然音が途絶えた。

「もしもし？」

声を掛けても返事は戻らなかつた。切れたのだ、と分かる。結局、何だつたのだろう。

携帯電話を耳から離すとすぐに岩崎の声が聞こえた。

「久住」

「この道場は圏外だ」

「……？」

「電波が入らない場所では携帯は鳴らない。……この意味が分かるか？」

「えつと」

それはつまりどういう事だろうか。

携帯電話を見ると確かに「圏外」の文字がある。携帯は持っていないのだけど、圏外では着信しない事くらいは分かる。だが、水守からの着信があつた。

どう考へても矛盾している。

考へるほどに分からなくなつた。

混乱をする明弥の代わりに鈴華が答える。言葉を選んでいくように慎重に。

「今の着信の相手は普通の人ではないんですね？」

「そう言つことになる」

分からぬ。

明弥は首を傾げた。

「普通の人じやないつて……水守さんはちゃんと生きている人だよ」「そう言つ意味じやない」

ますます意味が分からなくなり明弥は瞬く。
鈴華は全て分かっているといつ風に落ち着いていた。分からぬのは明弥だけだ。

置いてけぼりになつたが、話は続く。

「久住、彼女は何と？」

「ああ、うん、ええつと……」

混乱していたが、一人で混乱している場合でもない。明弥は彼女から言われたことをそのまま伝える。

話の流れで水守と出会つた時の事も簡単に話した。バレンタインの時の事故のこと今まで言及するとさすがに岩崎は顔をしかめたが何か追及することは無かつた。

一通り全て話し終えると彼は暫く黙り込んで何か思案する様な素振りを見せた。

やがてぼつりと彼は呟いた。

「実のところ、俺が人狼に会つたのは彼が初めてじやない。だから彼がずっと獣の姿でいることに危険性があることを承知している」「危険性？」

「人としての性が抜ける。つまり、身も心も完全に獣になつてしまふと言つことだ。そうなれば言葉は通じないし、人を襲つた場合人によつて処分される」

ぎくりとした。

それはつまり、太一を殺すと言つことだ。

脳裏に浮かんだのはアスファルトの上に倒れた赤髪の男。あの時は気を失っているだけだったが、あの時の杞憂が現実のものになってしまいます。

そんなのは嫌だ。

「増して今回は暴走している状態だ。早く戻してやらなければ獣に飲まれる。……南条斎と連絡は取れるか？」

「とれます。でも、今は遠出しているから、多分戻るのに時間がかかると思います。急いでも、深夜」

確認するように彼は頷く。

おずおずと声を上げる。

「な、何とかならないの？」

「だからそれを今、考えていたんだ。水守祐里子の言葉を信じるのなら方法が無いわけじゃない」

視線が彼に集中した。

少し緊張した風に岩崎が言つ。

「お前の……久住の波をもう一度彼にぶつけるんだ」

「え？」

「インパクトをもう一度起^ひすんですか？」

不安そうに彼女が尋ねる。

「ぐりと頷く。

「毒を以て毒を制す、聞こえは悪いけれど、やう言つ方法はいくらいでも使われる。やつてやれない事はないだろう」

「でもやり方が……」

可能性があるなら、やりたい。
けれどそのインパクトを起こす方法が分からない。

「強い感情」

「え？」

「久住が無自覚で使つているのなら今までの状況を考えて、おそらく

く引き金になつていいのは久住自信の感情だ。強く願えれば意識的に行つことも可能だろ？」「

上手く、行くのだろうか。

失敗すれば自分だけではなく他の人にまで迷惑がかかる。まして自分の能力について今さつき言われたばかりで自覚さえもない。そんな状況で上手くいくのだろうか。

何より太一は？

インパクトという能力で無理矢理獸になつた。もう一度同じ力を当てられて今度こそ取り返しの付かないことにならないだろうか。だけど、他に方法が分からない。

岩崎の言葉を、水守の言葉を信じて良いのだろうか。

二人ともいい人だが、今回は人の命に関わること。簡単には決められない。

(でも)

「俺が出来る限りのサポートはする。無理強いはしない。やるかどうか決めるのはお前だ」

「……」

明弥は鈴華を見る。

彼女は縋るような目で見ていたが、視線が交わると気まずそうに目を伏せた。

ぎゅっとまぶたを閉じる。

そしてゆっくりと開いた。

「やるだけやつてみる。だから、「

手伝つて欲しい。

明弥の言葉に、岩崎は力強く頷いて見せた。

いつも突然呼び出される。

そう言つ職業に就いているのだから仕方がないと思いつつも苛立ちがあった。自宅にいたのだからまともなスーツを着る余裕もあつたが、腹いせのように女性用のブランドパンツスーツを着込んできた。開襟シャツを着てマイクもしつかりとしてきている。

腰をくねらせながら廊下を歩くと、藤岡に慣れていない別の部署の人間達が驚いたように振り返つたが一課に近づけば近づくほど藤岡を気にする人は少なくなる。他の刑事にするように挨拶をし、堂々と廊下を歩く藤岡の為に道を譲つた。

藤岡は扉の前で一度立ち止まり口紅が取れてい無い事を確認するとい、ようやくドアを開いた。

すぐに男女の言い争う声が聞こえてくる。

藤岡は苦笑した。

近くにいた若手刑事の肩に手を置いて話しかける。

「なあに？ またやつてんの？」

「ああ、お疲れ様です。今さつき始まつた所ですから暫く続きますよ。この光景、もう一課の名物ですよね」

伊東は笑いをかみ殺したような表情で立ち上がる。

彼が座つていた椅子を奪つようつに座りながら藤岡は彼を見上げる。「あなたも随分と慣れたわよね。最初の頃はおろおろしていたのに」「さすがに何年も相手していれば慣れますよ。」「コーヒー飲みますか？」不味いですが、目が覚めますよ」

「不味さでね。その不味さがやみつきになっちゃうのよね、」「ううう仕事していると」

藤岡は欲しいと言つのを手で示す。

伊東は頷いた。

「えっと、ミルクと砂糖、どうします？」

いらない、と彼は返事を返す。

セルフの飲料コーナーからコーヒー用のプラスチックカップを出しコーヒーを注ぐ。何も入れずに藤岡の前に差し出し、自分用には砂糖を入れてかき混ぜた。

「珍しいですね、プラックなんて」「ダイエットしているの」

藤岡はふふと、科を作つて笑つた。

その様子に伊東は平氣な顔で笑つた。自分の女言葉も女装も慣れたな、と藤岡は思う。どう見ても綺麗なオカマにしか見えない彼の女装に最初は軽い嫌悪感を示していた伊東だったが今では全く氣にする様子もなく接してくる。

本名ではなくテレビで良く見かけるアイドルの名前と同じ「藤岡真由美」で通しても彼はまるで気にしなくなつた。誘おうとコナをかければさすがに嫌そうにしたもの、彼の女装を否定はしなかつた。

（この子つてば、私より順応性高いわよねえ）

不味いコーヒーを飲みながら上司の喧嘩を見つめる。

中津龍二と岩崎愛の仲の悪さは一課でも評判だつた。

超常能力が存在するという前提で捜査するゼロ班の班長である愛と、超能力を認めない中津とでは思想が全く違う。常に対立しあうのは無理もない話だつた。

ただ、中津が愛に突っかかる理由はそれだけでは無い。

もしも超常現象を全て否定したいだけなら、ゼロ班全員を敵視していくても良さそうなのだが、ゼロ班に属する伊東を中津は後輩として可愛がつてゐる。服装のことや注意される事もあつたが藤岡も敵視されている訳ではなかつた。

だから、愛に突っかかる理由はそれだけではない。理由になりそうな事を知つてゐるだけに、藤岡は複雑な気持ちでかつて同じゼロ班の一員だった中津を見つめる。

「で、今日は？」

「例の、中津刑事が会つた赤毛の獣の話です。今日、また出現しました」

「それで私も呼び出されたの？」

やれやれ、と藤岡は机に肘を突く。

「実はその対処で揉めているんですよ」

「つていうと？」

「目撃者の証言では人が突然獣に変わったそうなんですよ」

「へえ、それって……」

伊東は頷いて言い争う一人の方を見る。

「はい、愛さんは人なのだと言い麻酔銃を使うべきじゃないって言い張っています。しかし、何の証拠もないと中津さんが突っぱねています。写真を撮ったという目撃者が多数いたんですが、そのどのカメラにもちゃんとした画像が残っていませんでした」

写真に残った場合と残らなかつた場合、残らない方が本物である可能性が高いと経験上知つてている。最近のカメラは性能が良くなつた分、不可視の光までとらえてしまつたのだ。それで余計に曖昧にしか映らない。

今回の件で言えばその獣に変わつた人というのは人狼なのだろう。肉眼で直接見たわけではないが、藤岡はかつて一度人が狼に転変する姿を見たことがある。その時、その人の身体を覆つよう普通の人間に見ることの出来ない光が包み込んでいた。

おそらく目撃者のカメラに映つたのはその光に飲まれた姿なのだろう。

そんな曖昧な写真で中津が納得するとは到底思えない。

どつちにしても愛が、最終手段、を使えば中津が折れざるを得ないのだが、もう暫くこの不毛な言い争いが続くのだろう。

「時間稼ぎかしらね」

伊東は苦笑する。

「だと、思いますよ」

「それにしたつて中津さんも愛も、お互に食い下がるわね」

「今回さうやうやう勇氣くんで話合わせたようですよ。中津さんには連絡をとったそうなんですが」

藤岡は笑う。

「それで、これなのね」

「和崎警部の息子」である勇氣はこじりて少し特殊な立場にある。元々愛自身の立場も特殊なのだが、警察でもなく、協力者として公表する訳にもいかない勇氣は余計に特別な位置にいる。

自分の息子である愛にしてみても、中津にしてみても彼が事件に関わっているのは揉めずにはいられない事柄なのだ。まして危険が絡む状況ならば余裕に。

不意に伊東の胸ポケットから携帯のバイブ音が響く。

彼はテーブルに「一ヒーを置くと軽く断りを入れて携帯電話を取りだした。

「はい、伊東です。……ああ、今さう話していたんですよ」

「勇氣くん？」

「そうです。……はい、今中津刑事と揉めていますね、こちらは通常通りです。……ああ、なるほど、理解しました、ちょっと待って下さいね。それで、彼のこと、どう思いました？」

彼は携帯電話で話をしながら言い争いを続ける上司の方へと進む。携帯電話を肩に挟み込み、愛と中津の間を引き裂くよつて両手で押しやつた。

その行動に周囲の警官達がどよめく。

藤岡は口笛を吹いた。

「会話中よ、伊東くん」

「何か用ならば後にして下さい」

同時に抗議を入れられるが彼は全く顔色を変えず。愛の田の前に携帯電話を突き出して言つ。

「埒のあかない会話はそのへりこにしておこして下さい。緊急を要する電話です」

「誰？」

「出れば分かります。この場は自分が預かります」
愛は携帯電話を受け取り伊東を睨む。

「いい身分になつたわね」

「文句なら後で聞きます。今は電話に出て下さー」

「……」

まだ何か文句を言いたげな彼女だが、緊急といつ言葉が気に
なつたのか、すぐに電話を片手に電波の入りやすい窓辺の方へと向
かう。

話を途中で中断されればつが悪そに中津は溜息をつきながらネ
クタイを少し緩めた。

伊東は彼の方を見て言つ。

「今から獵友会に要請しても早くても明日の朝になりますよね?」
「そうなりますね」

中津は淡々と答える。

「では今晚我々が動いても問題はありませんね?」

伊東の言葉を中津は正確に理解する。

「市民の安全が最優先ならば」

「当然です。では、いいですか?」

「止めても動くつもりならばもう止めても無駄でしょ」

中津は諦めたように言つ。

電話から戻ってきた愛が嫌味のようにたたみかける。

「……もつとも、あなたに止める権利はありませんけどね、中津係

長

「それなら早くあなたの、必殺技、を使いなさい、岩崎警部
愛は少しむつとした表情を浮かべる。

嫌味よりも「岩崎警部」と呼ばれた事に腹を立てたのだろうと伊
東は軽く吹き出す。が、上司一人に睨まれ肩を竦めた。

「七光りは最後の手段よ。……協力をお願いできるかしら、中津く
ん

「分かりました。ただし、期限は明日の朝までです。それまでに何

とかしなければ……」

「はいはい、マタギでも何でも呼んで頂戴」

彼女は適当にあしらいつつ手を振る。

先刻の腹いせだらうか。彼女の性格を理解している中津は軽く肩を竦めた。

愛は伊東に向き直り指示をする。

「伊東くん、眞由美と一緒に馬鹿息子たちを保護して頂戴。あの子たち、自分たちだけで何とかするつもりよ

日は墮ち、そろそろ一般家庭は夕食時を迎える頃だらう。

夜勤明けも常務をこなせばさすがに疲労もピークに達する。木村早希はあぐびをかみ殺しながらふらふらと家に向かつて歩いていた。過酷だというのは知っていたが看護士というのは想像した以上の職業だった。小児病院が少ない今、入院患者の数は異常なほど多い。ベッドの空きも少なく、部屋にギリギリの人数を詰め込んでもまだ足りない。医師はもちろん、看護士の数も足りない。

その職業を選んだのだから文句をいう資格などないが、正直辞めたいと思うことも何度もあった。ここまで疲れて帰つてみるとやはり辞めたいと思うことが多い。

続けているのは子供達の笑顔と感謝の言葉があるからだ。見返りを求める訳ではないけれど、それが無ければ今も看護士など続けていられないだらう。

それに、と早希は思う。

(それに、今辞めたら南条さんと接点無くなつちやう)

南条太一は南条鈴華の兄だ。鈴華は一年の大半を病院で過ごしている。彼女が入院していると忙しい長兄に変わつて週に何度も病院を訪れてくる。このところ鈴華が一時退院を許可されたために、太一と会う機会も減つてしまつた。

それが最近早希を気弱にしている原因の一つなのだろう。彼とかなか会えないもどかしい日々を過ごしているうちに次第に看護士を辞めてしまいたいと思つようになつてきた。けれど、今看護士を辞めてしまえば彼との接点が完全に消えてしまつ。

入院患者の兄である彼に、どうやら自分は恋をしてしまつたらし

い。

早希は小さく溜息をついた。

少し前までこうではなかつた。

太一に会えれば少し嬉しいだけで、ここまで恋い焦がれることはなかつた。不安が余計にそうさせているのだろうと思つた。

鈴華が退院するその日、もちろん太一か、その上の兄である斎が来ると思つていた。だが、来たのは委任状を持つた坂上という運転士の男だつた。斎は普段から忙しくしていたから分かるが、彼が来られない日に太一が来ないと言つことは今まで無かつた。何かあつたのかと尋ねて見たが、運転士は風邪を引いたのだと言葉を濁すよう言つた。それから彼には一度も会えていない。

彼の身に何かあつたのではないかと不安に思つ。

不安に思つてゐるうちに自覚した。

自分は、南条太一のことが好きなのだと。

まるで学生のようだな、と自分でも可笑しくなる。そのくらい純真に彼のことが好きになつてしまつてゐた。だから、彼に会えないことが不安なのだ。彼に何かあつたのではないかと無意味な心配をしてしまつ。

「馬鹿みたい」

彼女は自嘲氣味に笑う。

そんなに心配ならば自宅に電話をかけてみればいい。会いたいのならそう伝えてみればいい。気の優しい彼のことだから無下に断るような事はしないだろうと思つ。

けれど、やはり怖いのだ。

「？」

視線を少し上げたその時だつた。

彼女の視界の端に、赤い影が入り込んだ。

「南条さん？」

彼のことを考えていたから連想してしまつたのだろう。視界の端に入り込んだ赤い影が太一のよくな気がしたのだ。影は田の前の十字路を横切るように道を進んでいったように見えた。

足早に彼女は十字路の所に急ぐ。

何故だか、彼に会える気がしたのだ。

夕食時のせいいか人気のない道を覗き込んで彼女は息を飲んだ。
街灯の下に立つのは、太一ではなかつた。……人間ですらなかつた。

狼のよう大きい犬。

明るいライトに照らされてその毛並みは赤く輝いていた。
早希は一步後退した。

(どうしよう……)

不意に思い出す少し前に獣に襲われて病院に運ばれてきた男の子のこと。警察の話では街中で狼のような赤毛の犬に襲われたという。多分、その犬がこの犬だ。

犬はこちらに気が付くと街灯の真下で、飛びかかる寸前のように身を低くして呻り声を上げる。

早希は犬から視線を逸らさないように片手でバックの中を探った。指先にぶつかつたのはデオドラントスプレーの缶。武器になりそうなものはそれくらいしかない。

彼女は取り出して構える。

走つて逃げれば犬は反射的に追いかけてくる。徐々に後退していくのがいいだろう。万が一襲いかかられた時はスプレーで驚かせた隙に何処かに逃げ込むしかない。幸い住宅街だ。民家に逃げ込めれば何とかなるだろう。

考えた矢先だった。

犬が地面を蹴る。

「！」

動くことも出来なければ、悲鳴さえも上げられなかつた。
高く跳躍した犬の身体が早希の上に覆い被さる。

その身体は大きく、早希よりもずっと大きな獣だつた。力も尋常ではない。押さえ込むよつた前足が左肩と肺を強く圧迫した。

「つ……」

息が出来ない。

もがくと、前足が肺から外れようやく呼吸が出来るようになる。

早希はもがきながら唯一自由に動く右手でスプレー缶を犬の頭部めがけて叩きつける。しかし、犬はびくともしない。もう駄目なのかも知れないと半ば諦めた時だった。

犬の片耳に光るモノを見つける。

それは太一が耳に付けているループのピアス。

「…………なん、じょうさん？」

「…………つっ！」

咳いた瞬間、犬の呻り声が苦しそうな声に変わる。自分でも何故そう咳いたのかわからない。

何故か犬が彼のような気がしてならなかつた。そんな風に考えてしまつのはおかしいことだが、その時の早希は疲労に加えて動搖していたために正常な考えが出来ていなかつた。殆ど確信をして早希は犬に向かつて呼びかける。

「太一さん！」

苦しんでいる。

犬が。

まるで人が顔を覆うように、犬の前足が顔にかかる。よろめくよう犬がゆつくりと彼女の上から退いた。

ふらつきながら徐々に彼女から遠のいていく。

「…………太一さん……」

追いかけようと彼女が動くと、犬が脅迫するように呻り声を上げる。

来るな。

まるでそう言われた気がした。

早希は上半身を起こしたままその場を動けなかつた。

やがて赤毛の犬はゆつくりと歩いていく。後ろ姿が闇に飲まれていいく。

涙が溢れた。

恐怖や安堵によるものではない。

あの犬が、太一が自分を庇つてどこかに消えてしまうような気が

して辛かつたのだ。

ふつり、と何かが切れるように彼女の身体がアスファルトの上に落ちる。

意識が遠のいていくのが分かる。

薄れていく意識の中で彼女は祈る。

彼に何事も無いことを。

南条太一が無事にいることをただ祈った。

沈んでいく。

淀んだ瀬の中に。

光を見失う。

何も聞こえない。

何も。

「久住

呼びかけられて明弥ははつとする。

インパクトという力について考え込んでいるうちにぼーっとしてしまったようだ。鈴華が心配そうにこちらを見つめている。

無理しないで下さい、そう言われている気がして、大丈夫だと微笑んでみせる。

明弥は普段と変わらないように振る舞つた。

「何？ もう着く？」

「…………。ああ、もうすぐ着く。その前にもう一度確認しておこ

う

「う、うん……」

彼は地図を広げて書き込まれた線を示す。

今、明弥達は新しく呼んだタクシーで市が運営する球場へ向かっている。この辺りで一番広く見通しの良い場所はそこか学校のグラウンドくらいしかない。人気の無さや追いつめやすさを比べれば球場の方が良いだろうと彼が判断したのだ。

そこに太一を誘き出し、インパクトを使って元の形に戻すのだと

彼は言う。

本当に自分に能力があると自覚できない。けれど、ここまで來たらやるしかないのだろうと思つ。

「彼がこのゲートから球場の中に入つたら、俺が行動範囲を狭めていく。お前は彼を止めることをただ強く念じ続ければいい」

「……本当に来るの？」

「来る。水守祐里子のおかげで少し細工を思い付いた。奴がその誘いに引っかかるつていらる既にここに向かつてゐるだらう」「引っかかつていなかつたら？」

尋ねると岩崎は一瞬口を噤み、一拍置いてから返事を返す。

「……お前は、彼に好かれている。だから、どっちにしてもお前を狙つてくるだらう。それは経験済みだと思うが？」

確かに明弥は初めて彼に遭遇した時から狙われている。

犬でさえ空気に紛れた匂いを嗅ぎ分けられる。人狼の嗅覚がどれだけあるのかは知らないが、人間より遥かに優れているだらう。多分、匂いを辿つて明弥を狙つてくるのだ。

「……！ 止めて下さい」

彼は急に運転手に向かつて叫ぶ。

まだ入り口に到達していない。

車が急停止し、車内が大きく揺れる。

岩崎の瞳は背後の暗がりを見つめている。

「ど、どうしたの、突然」

「……状況が少し変わつた。久住、鈴華、お前達一人で先に向かつてくれ。俺は後から追いつく」

「ちょ……岩崎君！」

岩崎は一万円札を明弥に押しつけるとそのまま外に飛び出していく。

彼の姿はすぐに暗がりに飲まれて消えた。

く。

「眞由美さん」

勇気は暗がりの中に呼びかける。

タクシーの中に見えたのが間違いでなければすぐ近くに彼がいるはずだ。

「ひつち、と手を振り呼びかける女装をした男の姿を見つけて勇気は彼に駆け寄つた。

「早いですね。……母から全部聞いていますか？」

もちろん、と彼は頷く。

「勇気くんのお願いだもの、私大急ぎで来ちゃつたわよ」

「伊東さんは？」

「向こうで待機しているわ。警察部隊、いつでも動ける準備出来ているわよ」

「部隊つて……よく中津さん説得できましたね」

藤岡は腰に手をあてて遠くを眺める。

「勇気くんたちが自分たちだけで動くつもりだつて言つたらあつさり納得したわよ」

「そうですか」

先刻、勇気が母親の愛に連絡を取つた時、万が一のこと備え警察部隊の編制を要請した。正直こんなに早く来てもらえるとは思つていなかつたし、最悪少人数部隊であるゼロ班しか動かないかとも思つていた。

けれども愛が機転を利かせたのだろう。

ただ、中津も勇気の性格を知つてゐる。自分たちだけで解決しようなどと思つような考え方を持つていないことくらい分かつてゐる。ひょつとしたら、騙されてくれたのではないだろうか。

「むしろ愛の方が乗り気じやなかつたわ

「どういな、と勇気は思つ。

愛はどんな些細な事件でも勇気が関わりを持つことを嫌がる。しかし超常現象に関わる事件か否かを判断する時、勇気のよつた稀な

力が必要になつてくる。だからいつも仕方なく協力させたが今回のように明らかにリスクの高い事件では関わらせたくは無かつたのだろう。

だが、勇気が珍しく強く押したことを簡単に反対はできなかつたのだ。

結局乗り気でなくとも愛は動いた。

息子としてでなく、超常能力者として信頼されていなければ叶わなかつたことだ。

「相方君には私たちが待機していること、教えなくていいの？」

「あいつには……保険をかけていること知つて欲しくない」

勇気は少し言い淀む。

「へえ、と藤岡はニヤニヤと笑う。

「勇気くんも可愛いところあるのねー」

「違います。久住を本気にさせるためです」

「あらあら、せっかく友達になれそうなのに、それじゃあ嫌われちゃうわよ」

「俺はそれでいいんですよ」

彼が影響の波を出せるか否か、それは半信半疑だ。しかし彼がその力を持っているのは確実だ。今までのことを考えれば彼は追いつめられていないと力を出せない。

警察が控えていることを知れば甘えが出る。

だつたら知らせずに追いつめるしかない。

優しいフリをしてこんな陥れるような卑劣な手段に出たと知れば、いくら毒気のない彼でも怒るだろう。

それでも構わないと思った。

例え憎まれる結果になつても、明弥が自覚をして彼自身や周囲の危険が減るのならばそれでいいと思う。

今までだつてそうしてきたのだから、今更また誰に恨まれても平気だ。

「球場に人狼を追い込んで下さい。おそらくもう既にこの周囲には

来ているはずです」

「オーケイ、勇気くらはどうするの?」

「準備があります。久住たちと合流します。万が一の時は合図を…

…」

送る、といつ言葉に被さるよつに球場の中から叫び声が聞こえる。

鈴華のものだ。

血の気が引いた。

「まさか、卑すぎる……っ!」

「大丈夫？」

手を差し伸べると彼女は礼を言つて明弥の手を掴んだ。
球場の使用許可をとつていないので、狭い通路から中にはいる
しかない。通路と言つても破れたフェンスを潜つてよじ登る道だ。
小学生の頃、この道を使って球場の中で遊んでいて良く怒られた。
未だに直つていないので管理が杜撰なのか、それとも直してもすぐ
に壊されるせいなのかは分からぬ。ただ、この通路のおかげで今
球場の中に入ることが出来たのは確かだ。

鈴華には少し段差が厳しく明弥が上から引き上げる形で中に入つ
た。女の子の体重を気にするのは失礼かも知れないが、彼女の体重
は妙に軽い。明弥の力でも十分引き上げられるような重さだった。

「来て良かったの？」

「はい、太一君は……私の兄ですから」

「心配だよね。俺、頑張るから」

「……大丈夫ですか？」

問われて明弥は苦笑する。

やはり岩崎のようにはいけない。自分では彼女を不安にさせてし
まう。

「頼りないだらうけど、出来る限りのことはするから」

「そうじゃないです」

「ん？」

「無理していいですか？」

していると言つても、していないと言つてもどちらも嘘だ。
明弥は微笑む。

彼女の優しさが嬉しかった。

「正直言つとね、逃げ出したいほど怖いよ。でも、何もしないで後
悔するのはもっと怖い。出来る事しないで嘆くのは嫌なんだ」

「久住さん、もしかして……」

「彼女が言いかけた時だつた。

フェンスに何か叩き付けるような音が聞こえ明弥は慌てて振り返つた。咄嗟に鈴華を自分の後ろに隠す。

数十メートルほど離れた先の金網が大きく揺さぶられている。外にあるライトに照らされて、揺さぶつていしもの姿が見え隠れした。

赤い毛並みの大きな犬型の動物……太一だ。

「そんな……まだ、早いのに……」

鈴華が怯えたような声をあげる。

密着した身体から小刻みに震える振動が伝わってくる。いや、震えているのは明弥自身も同じだった。

覚悟していた。

けれどやはり怖い。

「鈴華ちゃん」

守りなれば。

「……戻つて、岩崎君探してきて」

せめて、彼女だけは。

「早くつ！」

彼女の身体を突き飛ばすのと同時に明弥は真逆の方向に走り始める。

同時に金網を突き破つた赤毛が高く跳躍した。

「久住さんつつ……！」

悲鳴のような鈴華の声。

明弥は身を低くして獸の鋭い爪を交わす。頭上を鋭い風が横切つた。

どうすればいい？

混乱する頭を冷静にさせようと明弥は再び走る。市営の球場とはいえそれほど広くないグラウンド内を走り執拗に襲いかかる太一の攻撃をギリギリのところで交わしながら、彼が人間の姿に戻ること

だけを祈り続ける。

強く想う。

戻したいと。太一を死なせたくない、鈴華を悲しませたくない。自分だって死にたくない。

影響の波は出ているのだろうか。

どうしたら彼が元に戻るのだろうか。大柄で怖しそうだけど、優しい目をした彼に、どうやつたら戻るのだろう。

「太一君、止めて！！」

泣き叫ぶような声。

鈴華が泣いている。それでも太一は反応を示さなかつた。まるで獲物を追い立てるように太一は呻り声を上げる。遊びはおしまいだ、そうとどめを刺すことを宣言するような声。

振り向いた瞬間、身体に大きな衝撃を覚える。

牙しか見えない。

「……っ！」

明弥は目を瞑る。

「夜芸速の 十拳剣 此れ火産靈と成り、！！」

突然、岩崎の叫ぶ声が聞こえ太一の身体が炎に包まれる。目を開くとこちらに向かつて走つてくる彼の姿が見える。何が起こったのか明弥が理解するよりも早く。彼は太一に向かつて体当たりをする。炎に包まれていたように見えた太一は、ひるんだ様子を見せていたが、その身体の周りに炎は見られなかつた。大きな獣の身体は激しく飛ばされた。

岩崎は明弥を庇うように前に立ちながら何かを呴くように言つ。

「千早振る神のすまいは吾が身にて いで入る息もうちそとの神

、独特的な節を持つた声だつた。

いつもの岩崎の喋る口調や声質とも違う。

不思議な韻律だつた。

彼は手のひらに何かを載せてふつと息を吹きかける。細かく刻ん

だ紙のような白いものがふわりと空中に飛び散る。

その細かい白い破片は地面にゅつたりとした円のような形を描く。

彼の手のひらは火傷でもしたかのように赤く爛れていた。

明弥は目を瞬かせた。

「ひとふたみよいまななやこのたり」

岩崎の向こう側で太一が起きあがる。

彼は空中に何か描くように手を動かした。

「ふるくゆらゆらとふるべ！」

「！」

明弥は覚えず耳に手を当てた。

彼の言葉に呼応するようにあたり一帯に耳鳴りのような甲高い音が響き渡つた。空気が震えているのだ、と明弥は思う。

ぐあああ、と太一が今までにない苦しげな声を上げた。

「久住！」

促すように彼が叫ぶ。

やれ、と言つているのだ。

明弥はとにかく強く念じる。

だが、

「岩崎君！」

目の前の岩崎の上に、狂つたように吠えながら太一がのしかかる。だめだ、間に合わない。

明弥は頭の中で悲惨な光景を連想する。

獣に頸動脈を噛まれ目を剥く彼の姿。

そんなの、嫌だ。

何かが。

自分の中からせり上がりてくる。

吐き気のよう、

そしてそれは引っ張り上げるように明弥の意識を飛ばす。

見えたのは底なし沼のような黒い影だった。
全てのものを引きずり込むとするように混沌とした影から触手
が伸びる。

そこから手が生えている。

否、影が誰かを引きずり込もうとしているのだ。
もがき苦しむような手を明弥は掴んだ。
離したら終わってしまう気がした。

するするとそれは明弥までも飲み込もうとするよつに影が迫つて
くる。

明弥の手が半分埋まった。

黒い影次々と伸ばされ明弥の首を掴む。
それでも手は離したくなかった。

(これは、太一さんなんだ)

離したら明弥は助かる。

でも、太一さんは間に合わない。

諦めたくない。

今、彼の手を、残された意識を握っているのだから。

……ズミ

声が聞こえる。

誰から自分の手を掴んだ。

引き上げようとするよつに

(いける)

明弥は渾身の力を込めて太一を闇の沼から引き上げる。

強く、何かが輝いた。

「久住！」

明弥ははつとした。

自分の肩を掴んで揺さぶつている男の姿が見えた。
何が、どうなった？

「……いわ……さき、君？」

呼びかけると彼はほつとしたように息を吐く。
気が付くと球場の中には沢山の人がなだれ込んでいた。
作業服を着ている者もいれば、警察の制服を着ているものもいる。
いつの間にこれだけの警官がここに着たのだろうか。

「……太一さんは！？」

辺りを見ても赤毛の男の姿は見えない。
その代わり警察官が何かを調べている姿が目に入る。
まさか、と不安がよぎった。

女刑事が溜息をつくように言つ。

「大丈夫よ、今病院から連絡があつて命に別状は無いらしいわ。鈴
華という女の子も一緒よ。……言つておくけど、獣医ではないわ」
彼女はそれだけを言い明弥から離れていった。

明弥は岩崎を見る。

「それじゃあ」

「ああ、ちゃんと人の姿に戻つた」

「……良かつたあ」

言つと岩崎が吹き出した。

明弥は目を丸くした。

こんな風に笑つた顔を見たのは初めてじゃないだろうか。

「お前、人のことばつかだな」

「そ、そうかな？」

「何はともあれ、お前、よく頑張つたよ。……ありがとう」

「え？ あれ、お礼言つの、こっちだよ」

彼は首を小さく振つて明弥の肩に額を押し当てた。

一瞬泣き出したのかと思つて戸惑うがそうでは無かつた。彼はお

かしそうに笑いながら肩を振るわせている。
その様子がおかしくて明弥も吹き出した。

ソルジャー、明弥の長い一日がついに終わりを告げた。

書類をまとめてクリップで留め処理済みのボックスに入れる。

軽く目を通し、印を押すだけの書類を処理するのはそれほどの労働にはならないが、出張でたまつた仕事分量を考えると少しの時間も無駄にしたくはなかった。

斎はメガネの中指で押し上げて次の書類を手に取る。

「こんこん、と控え目なノックの音がして彼は返事を返した。

「どうぞ」

失礼します、と言つて入つてきたのは秘書の女ではなく南条家に昔から務める坂上だつた。

彼は斎が生まれるよりも前から南条家に仕えている。身分制度が無くなつて久しい現代社会においても、まだ古い家の周りにはその家に対するある種崇拜のような行動を取るものがある。坂上もそう言つた昔の身分を重用視する節があつた。

幼い頃から父親に従う坂上の姿を見ていた斎は、てつきり彼は父親の人柄に惹かれているのだろうと思ったが、父親が床に伏せて斎が家主として働くようになると坂上は斎の側で働くようになった。

その時初めて坂上が人ではなく家に仕える人間だと言つことを認識した。

坂上は入り口で頭を下げる。

「斎様、警察の方がお見えになられました」

出張先で坂上に連絡は受けていた。

彼が不在の間、坂上が滞りなく対処をしていたようだが、警察はやはり斎と話がしたいとアポをとつてきた。忙しい斎であったがこの状況で拒むわけにもいかない。仕事の合間の時間ならば構わないと了承したのだ。

ほぼ予定していた通りの時間に、斎は好感を覚えた。

「ありがとう、通して下さい」

はい、と返事が返る。間もなく小柄な女の刑事と、背の高いがつしりした男の刑事が入つてくる。二人ともまだ若く同輩のように見えたが、男の態度で女が上司であることが分かる。

女性の年齢は分かりにくい。おそらく斎が最初に思つた年齢よりも遥かに上なのだろう。

「はじめてまして、一課の坂崎です」

「伊東です」

「人は手帳を見せながら軽く会釈をしたが、その視線は斎から外されることは無かつた。彼らの後ろで坂上が静かに廊下に出てドアを閉めるのが見えた。

斎は微笑んで挨拶を返した。

「南条斎です。弟がお世話になつたそつですね。ありがとうございます。どうぞあちらに」

応接用のソファを示すと一人はソファに腰を下ろした。
きょろきょろと見回す様子は見せなかつたが、二人とも確實に部屋の中を観察している。眼光の鋭さはさすが刑事と言つところだ。
間髪入れずにやつて来た秘書の女がお茶を三つ運びテーブルの上に並べた。

「随分お忙しいようですね」

女が言つ。

「表向きには科学研究所だとか」

初めからその話題が来ると思つていなかつた斎は多少面を喰らつ。秘書は無言のままお辞儀をして部屋を出て行く。

「表向き、というのは少し語弊があるようですが」

斎は驚いてしまつた表情を隠すように苦笑いを浮かべる。

「実際に科学の研究も行つていますから嘘はないでしょ。研究する対象に超常現象に關することが混じつていて、それだけのことです。昨今新興宗教などの起こした事件の影響でカルトを思わせる単語は嫌われますからね。我々もそれと同じと思われては心外です」
斎が責任者を務めるこの研究所は、事件や事故などを含め様々な

現象を科学を用いて解き明かしている。彼らと会うのは初めてだつたが、警察関係者が捜査協力を求めてここを訪れることが多い。公開はしていないが、超常現象に関する研究も行つていた。

当然警察もそれを知つていただろう。あえて確認を取るのは何かを探つてゐるのだ。斎は言葉に注意しながら話を進める。

「太一さんは血が繋がらないようですね」

「ええ、弟は繼母の連れ子です」

「人とは違うことを知つていましたか？」

「はい、知つてゐます。義母は再婚後すぐに亡くなつたので、彼がそうなつた経緯は知りませんが子供の事から人と違うことは認識していました」

「よく、一緒に暮らせましたね」

鋭い言葉だつた。

怒り出す者もいるだらう。だが、斎は冷静に答える。

「私も子供でしたから、怖いと思うよりは、格好良い、を思つていました」

「妹さんは随分と年が離れていますね」

「彼女は父の妾腹の子です。親子ほど年が離れていますが、血を分けた妹です」

「複雑な家庭環境なんですね」

女は淡々と言い放つ。

挑発をしているようだ。斎は瞳の奥を鋭くさせた。あまりにも率直すぎる質問に激昂して何か重要な事を漏らすこと待つてゐるのか、あるいは動搖させて聞き出しやすくしてゐるのか。

「何か、私に聞きたいことがあるようですね」

斎は敢えて直球を投げかける。

女は顔色を変えずに答える。

「回りくどいことは嫌いですか？」

「はい、時間の無駄と思います」

「ならば单刀直入に聞きましょ。あなたは最初の獣化の時、手早

く対処しました。その時に、あなたは彼が再び暴走する危険性を認知していましたね。それなのに何故今回、彼を野放しにするような行動を取ったのですか？

なるほど、と斎は思う。单刀直入と言つたものの、彼女が本当に聞きたいのはそこではないのだろう。

「この岩崎という女刑事、なかなかの智慧者だ。他の刑事と同じように見ていれば痛い目に遭いそうだ。」

「私は弟を普通の人間だと思っています。檻に閉じこめる事はしたくありません。それに今回は私自身油断をしていました。今までこういった事はありませんでしたからね」

「前例があれば油断はしなかつたと」

「どうでしよう。私は弟を信頼しています。それも油断の一因になつた可能性は捨て切れません」

彼女はじつと斎の瞳を見る。

斎は逸らすことなく見つめ返した。

お互に探り合つような一瞬。

観念した、といつ風に斎は笑つて見せた。

「貴女は、この研究所で行われた実験の結果、太一のような子が生まれ、鈴華もまたその犠牲者であると思つていますね？」

「そう言つた前例があるならば疑うこともあります」

「私を捕まえるべきと考へてゐるのでしたら、何か理由をつけて拘束するのが宜しいでしよう。大人しくするつもりはありませんが、逃げたり隠れたりするつもりはありません」

「認めるのですか？」

斎は笑みを崩さないまま首を振る。

「いいえ。ただあなたの言動からはそうしたいように思えます。實際私は太一の血液を採取し、研究をしています。それを人体実験と思われても仕方のないことだと思いますが？」

何かを言おうと口を開きかけた女刑事を、隣で黙っていた男が止める。

邪魔をするな、と言つよう前に岩崎が睨むが男は構わずに口を開く。「気を悪くされたのでしたら申し訳ありません。我々は他の捜査班のように犯人を挙げることを目的にしているわけではありません」

男の外見は警官と言つよりはヤクザかマフィアのように見えるが、岩崎の印象が鮮烈すぎるために、むしろ優しい印象を覚える。だが、この女刑事と組んでいる彼もまた相当なのだろうと思つ。

「人は禁忌の力を持てば使いたがる。大惨事に繋がりかねないサインがあれば見逃すことは出来ません」

「同感です」

「いずれ、あなたに協力を仰ぐこともあるでしょう。我々は超常現象に関しては素人ですから」

やはり彼もまた食えない男だ。

斎は息を吐いてソファに寄りかかり、にこりと笑つて見せた。

「その時は、出来得る限りの協力はさせて頂くつもりですよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6838w/>

ウィッヂクラフト Ain Suph Aur

2011年10月10日03時11分発行